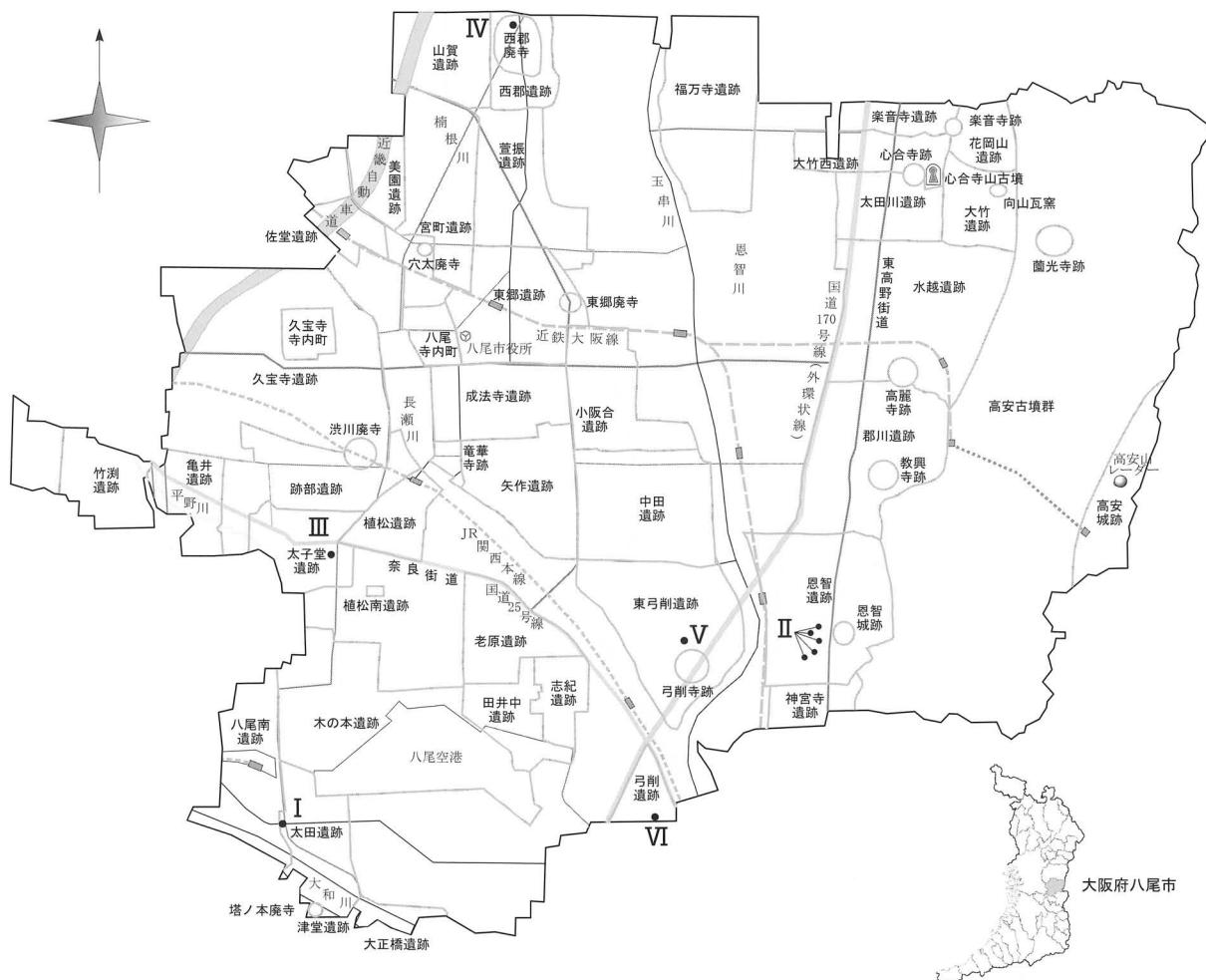


- I 太田遺跡(第9次調査)
- II 恩智遺跡(第19次調査)
- III 太子堂遺跡(第12次調査)
- IV 西郡廃寺(第5次調査)
- V 東弓削遺跡(第16次調査)
- VI 弓削遺跡(第8次調査)

2010年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

- I 太田遺跡(第9次調査)
- II 恩智遺跡(第19次調査)
- III 太子堂遺跡(第12次調査)
- IV 西郡廃寺(第5次調査)
- V 東弓削遺跡(第16次調査)
- VI 弓削遺跡(第8次調査)



2010年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は、大阪府の中央部東寄りに位置し、西は上町台地、東は生駒山地、南は羽曳野丘陵に囲まれた山麓・丘陵先端から平野部にかけて立地しています。山麓や丘陵先端部には、古く旧石器時代に遡り得る人々の生活の痕跡が点在しています。また、平野部では、古大和川水系が運び続ける土砂が厚く堆積しており、その中に、弥生時代以降の生活の跡が連綿と積み重なっています。

このような先人の残した財産－埋蔵文化財－は、市民が共有すべき財産であるといつても過言ではありません。しかし、市民生活の利便性や豊かさを追求するための開発工事は、一方ではこのような共有財産を破壊することが前提となってしまいます。そこで、私どもは、開発工事によって破壊される埋蔵文化財について事前に発掘調査を行い、記録保存・研究に努めています。

本書は、市民生活に密接にかかわる公共下水道工事に伴う発掘調査の報告をまとめたもので、平成19年度から21年度にかけて行った6件の調査成果が集録されています。今回報告する調査地からは、弥生時代後期以降中近世に至るまでの遺構や遺物が検出され、古代史上での八尾市の重要性があらためて認識されたといえます。本書が地域史、ひいては日本史解明の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、八尾市下水道部をはじめ多くの関係諸機関および地元の皆様方に、多大な御協力をいただきましたことを心から厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 西浦昭夫

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成19～21年度に実施した公共下水道工事に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成22年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
 1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I 坪田真一、II・III・V 米井友美、IV・VI 木村健明で、全体の構成・編集は木村・坪田が行った。
 1. 本書に掲載した地図は、八尾市教育委員会発行の16000分の1の八尾市埋蔵文化財分布図－平成19年度版－、八尾市発行の2500分の1地形図(平成8年7月編纂)を使用した。
 1. 本書で用いた標高はすべてT.P.(東京湾平均海面) + 値(m)である。
 1. 本書で用いた方位は磁北及び座標北(国土座標第VI系)を示す。
 1. 遺構名は下記の略号で示した。
溝 – S D、土坑 – S K、ピット – S P
 1. 遺物実測図の断面表示は、須恵器が黒、その他を白とした。
 1. 土色・土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編1989『新版標準土色帖9版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修を用いた。
 1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目 次

はしがき

序

I 太田遺跡第9次調査(O O T 2008-9).....	1
II 恩智遺跡第19次調査(O J 2007-19).....	5
III 太子堂遺跡第12次調査(T S 2008-12).....	13
IV 西郡廃寺第5次調査(N K T 2008-5).....	17
V 東弓削遺跡第16次調査(H Y 2007-16).....	27
VI 弓削遺跡第8次調査(Y G E 2008-8).....	35
報告書抄録.....	43

I 太田遺跡第9次調査(OOT2008-9)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市若林町三丁目地内で実施した公共下水道工事(20-126工区)に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する太田遺跡第9次調査(OOT2008-9)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。なお諸事情から、第9-1次と第9-2次の2次に分けて調査を実施した。
1. 現地調査は、第9-1次が平成21年3月12日～3月27日(夜間実働1日)、第9-2次が平成21年4月13日～4月24日(夜間実働2日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は第9-1次が4m²、第9-2次が8m²で、総面積は12m²である。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成22年3月に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は坪田が行った。

本　文　目　次

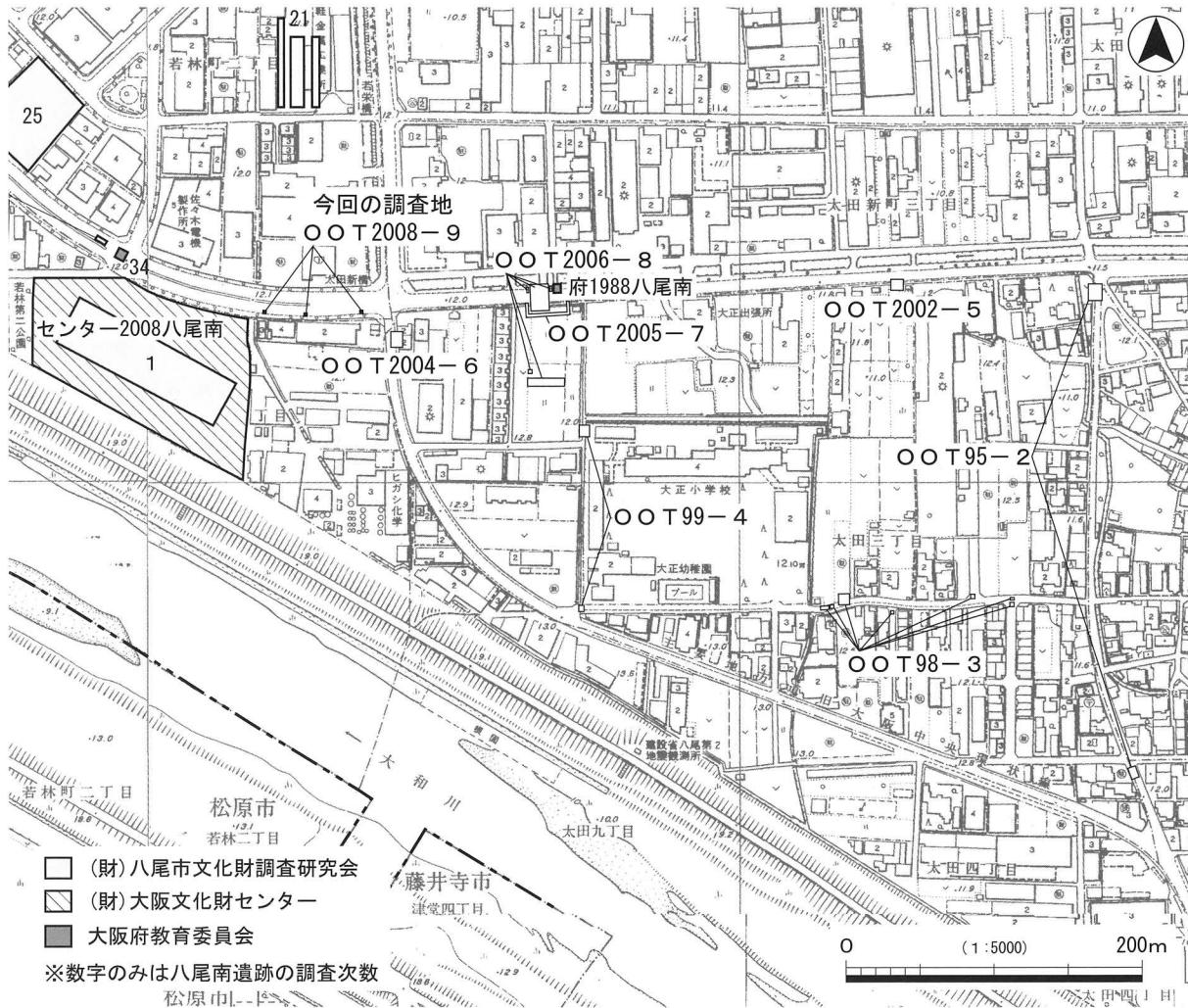
1. はじめに.....	1
2. 調査の方法と経過.....	2
3. 調査概要.....	2
4. まとめ.....	2

I 太田遺跡第9次調査 (OOT2008-9)

1. はじめに

太田遺跡は八尾市南部に位置する旧石器時代～中世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、太田三・四・九丁目、太田新町一・三丁目がその範囲とされている。地理的には南から伸びる羽曳野丘陵の先端部と、北側に広がる旧大和川が形成した沖積地との接点部に位置する。周辺では、北側に木の本遺跡、西側に八尾南遺跡、東側に大正橋遺跡、南側には大和川を挟んで津堂遺跡が存在する。

今回の調査地の東側では当研究会による第6～8次調査を実施しており、第8次調査では縄文時代～中世の遺構・遺物を検出した他、旧石器時代の地層から石器も出土している。また西側に近接する八尾南遺跡域では、当研究会による第1次調査、及び同地点での(財)大阪府文化財センターによる調査(センター2008八尾南)が行われ、洪水砂で覆われたため良好に保存されていた弥生時代後期の集落をはじめ、弥生時代後期末～古墳時代初頭の墓域、古代～中世の集落域が検出されている。



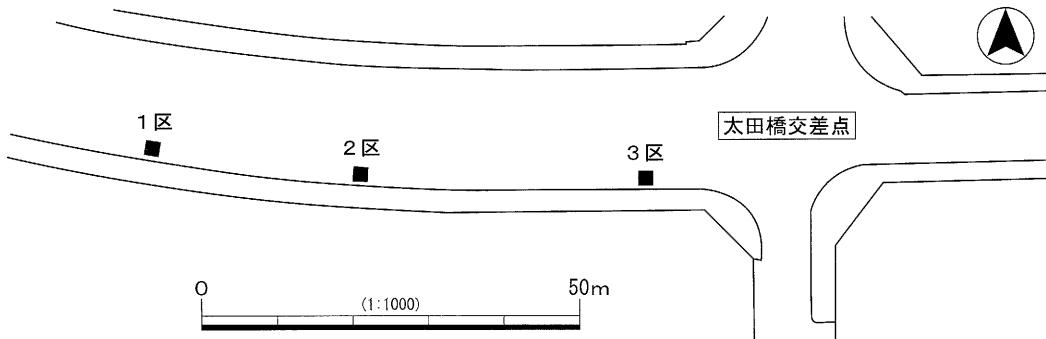
第1図 調査地位置図

2. 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市若林町三丁目地内で実施した公共下水工事(20-126工区)に伴う調査で、当調査研究会が太田遺跡内で行った第9次調査(OOT 2008-9)である。

調査地は人孔部分(規模約2.0×2.0m)3箇所で、総面積は12m²を測る。地区名は西から1～3区とした。このうち、3区が平成20年度に実施した第9-1次調査、1・2区が平成21年度第9-2次調査である。

調査は工事掘削深度である現地表(T.P.+12.3～12.4m)下2.3～2.8mまでを機械・人力掘削併用で行い、遺構・遺物の検出に努めた。なお調査はすべて夜間調査である。



第2図 調査区位置図

3. 調査概要

いずれの調査区においても、遺構・遺物は検出されなかった。

1区では盛土以下に水成堆積が続いているが、上部の1・2層は西側に現存する水路の旧流路の可能性がある。また下部の3層以下については、南西の八尾南遺跡の調査成果(センター2008八尾南)から勘案して弥生時代後期頃の流路の存在、あるいはその影響による堆積を考えられる。この水成層は2・3区には及んでいない。

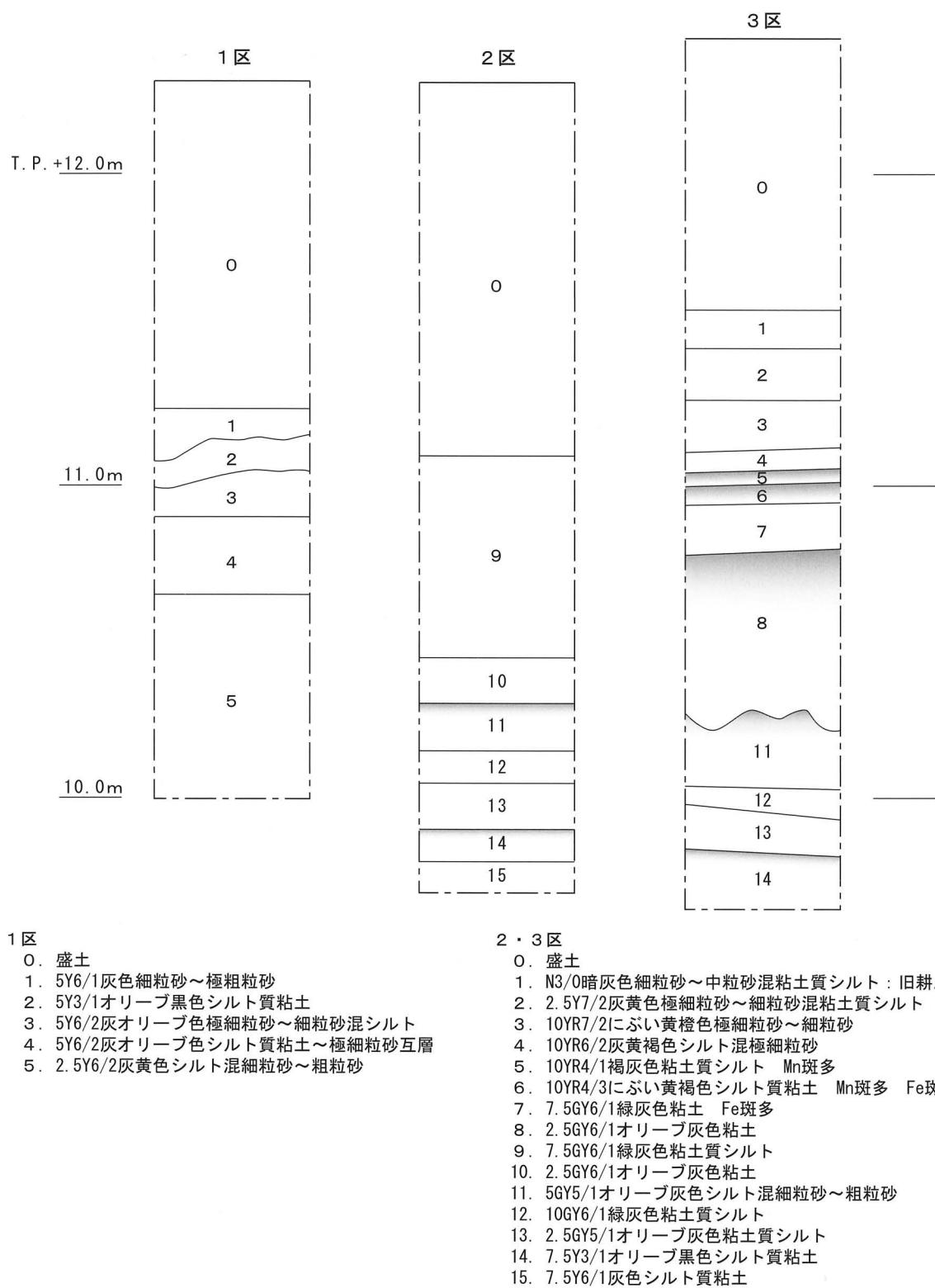
2・3区は下部ではほぼ同様の層位が認められた。3区5・6層はMn斑・Fe斑を多く含む土壤化層で、東部の調査成果からみて古代～中世頃の水田面の可能性がある。8・11・14層上部は暗色を呈し、土壤化していると考えられ生活面の可能性がある。弥生～古墳時代に相当すると思われる。

4. まとめ

今回の調査では遺構・遺物は検出されなかった。しかし東の2・3区では数枚の土壤化層が認められ、東の調査地や西の八尾南遺跡域で確認されている弥生時代～中世の集落域が広がっているものと考えられる。

参考文献

- ・岡本茂史・正岡大実・他2008『八尾市 八尾南遺跡－大和川改修（高規格堤防）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－（財）大阪府文化財センター調査報告書第172集』財団法人大阪府文化財センター
- ・高萩千秋2005「Ⅱ 太田遺跡（第6次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告82』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋2007「Ⅰ 太田遺跡（第7次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告104』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助2007「Ⅱ 太田遺跡（第8次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告104』財団法人八尾市文化財調査研究会



第3図 断面模式図 (S=1/20)



1区調査地(北西から)



1区北壁 (T.P. +10.6~12.0m)



2区北壁 (T.P. +11.0~12.3m)



2区北壁 (T.P. +9.7~12.3m)



3区調査地(北から)



3区東壁 (G.L. ~ T.P. +10.5m)



3区東壁 (T.P. +9.8~10.7m)



3区下層機械掘削(南東から)

II 恩智遺跡第19次調査(OJ 2007-19)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市恩智南町二丁目地内で実施した公共下水道工事(19-113工区)に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する恩智遺跡第19次調査(OJ 2007-19)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。なお、調査期間の諸事情から、第19-1次と第19-2次の2次にわけて調査を実施した。
1. 現地調査は、19-1次が平成20年2月18日から3月31日(実働2日)、19-2次が平成20年5月8日から7月13日(実働3日)にかけて、米井友美を調査担当者として実施した。調査面積は第19-1次が約4.0m²、第19-2次が約4.5m²で、総面積は約8.5m²である。
1. 現地調査においては、赤松英幸・中野一博・和田直樹の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成22年3月に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、遺物実測－市森千恵子・永井律子、図面レイアウト・トレース－米井、遺物写真撮影－木村健明が行った。
1. 本書の執筆・編集は米井が行った。

本　文　目　次

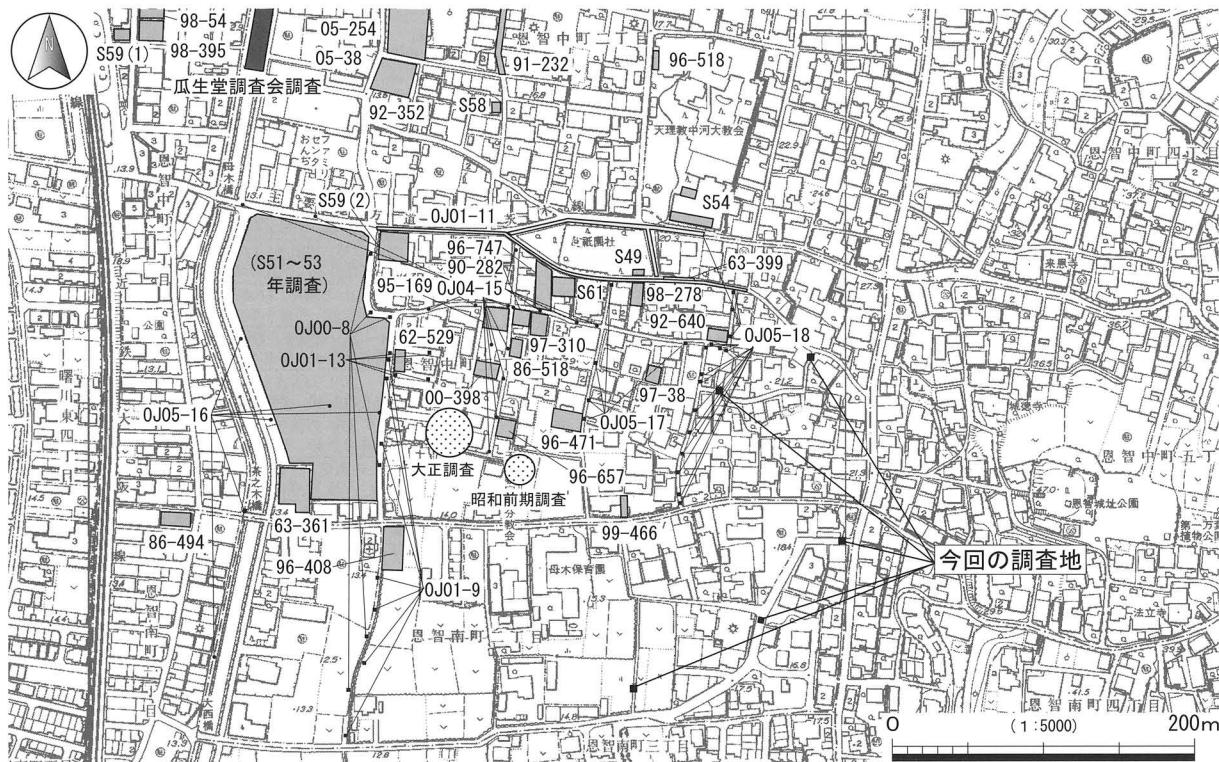
1. はじめに.....	5
2. 調査概要.....	7
1) 調査の方法と経過	7
2) 基本層序	7
3) 検出遺構と出土遺物	9
3. まとめ.....	9

II 恩智遺跡第19次調査 (O J 2007-19)

1. はじめに

恩智遺跡は八尾市南東部に位置する、旧石器時代～鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、恩智北町一～四丁目、恩智中町一～五丁目、恩智南町一～五丁目にあたり、南北約1.0km、東西約1.2kmがその範囲とされる。地理的には生駒山地西麓から形成された扇状地から低地部にかけて広がっており、周辺では、北側に郡川遺跡、南側に神宮寺遺跡、西側に玉串川を挟んで東弓削遺跡が存在する。

本遺跡は、大正6年(1917)の梅原末治・島田貞彦両氏による踏査と鳥居龍蔵氏による試掘調査、昭和14年(1939)の大坂府の事業による藤岡謙二郎氏の発掘調査、昭和23年(1948)の今里幾次氏による出土遺物の報告をはじめとした多くの調査が実施されており、縄文時代～弥生時代を中心とした遺跡として古くから周知されている。近年も天王の杜周辺とその南～南西側、北側を中心に多くの発掘調査が行われ、本遺跡は天王の杜周辺から北西～西側に展開していたことが判明している。今回の調査地は遺跡南東部にあたり、遺跡の中心とされる天王の杜周辺と遺跡東部の恩智城跡の間に位置することから、これらの時期の遺構・遺物の存在が想定された。



第1図 調査地周辺地図

表1 周辺の調査地一覧表

略号	所在地	調査期間	調査原因	主な遺構・出土遺物	文献名	機関
S49	恩智中町 3丁目	1974	防火用水槽 設置	縄文時代～弥生時代～土器	山本昭・泉本知秀・福岡澄男 1976「八尾市恩智遺跡の出土遺物」『大阪文化誌』第2巻1号	市教委
瓜生堂調査 会	恩智北町～ 恩智中町	1975～ 1978	河川改修	弥生時代前期～古墳時代中期～木 管墓・土坑・溝・井戸・自然河川	田代克巳他 1980「恩智遺跡」瓜生堂遺跡調査会	瓜生堂遺 跡調査会
昭和51～ 53調査	恩智中町 3丁目	1976～ 1978	集合住宅建 設	弥生時代中期～土器	八尾市教育委員会	市教委
S54	恩智中町 2丁目	1979	天理教教会 増築	弥生時代～土器	八尾市教育委員会	市教委
S58	恩智中町 2丁目	1983/2	個人住宅建 設	弥生時代前期～土坑・弥生土器	山本昭・米田敏幸『八尾市内遺跡昭和57年度発掘調査報告書～教興寺の調査～』八尾市文化財調査報告9 昭和57年度国庫補助事業	市教委
S59(1)	恩智中町 1丁目	1984/5 ～6	銀行建設	弥生時代中期～槨棺・溝	米田敏幸 1985「2. 恩智遺跡の調査（恩智中町1丁目77-2）」『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告11 昭和59年度国庫補助事業	市教委
S59(2)	恩智中町 3丁目	1984/6	個人住宅建 設	弥生時代～土器	米田敏幸・鶴村友子 1985「八尾市市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書」八尾市文化財調査報告11 昭和59年度国庫補助事業	市教委
S61	恩智中町 3丁目	1986/7 ～9	個人住宅建 設	縄文時代晚期～小穴・落込み・土 器集積	鶴村友子 1987「八尾市市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書～恩智遺跡の調査～」八尾市文化財調査報告14 昭和61年度国庫補助事業	市教委
86-494	恩智南町 1丁目	1987/7	個人住宅建 設	遺構・遺物なし	鶴村友子 1988「5. 恩智遺跡（86-494）の調査」『八尾市市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告17 昭和62年度国庫補助事業	市教委
86-518	恩智中町 3丁目	1987/8	個人住宅建 設	弥生時代中期～土坑・小穴	米田敏幸 1988「6. 恩智遺跡（86-518）の調査」『八尾市市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告17 昭和62年度国庫補助事業	市教委
62-529	恩智中町 3丁目	1988/5	個人住宅建 設	弥生時代中期～土器・石器	近江後秀 1989「5. 恩智遺跡（62-529）の調査」『八尾市市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告19 昭和63年度国庫補助事業	市教委
63-361	恩智中町 3丁目	1988/11	個人住宅建 設	弥生時代～古墳時代～遺物包含層	米田敏幸 1989「6. 恩智遺跡（63-361）の調査」『八尾市市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告19 昭和63年度国庫補助事業	市教委
63-399	恩智中町 3丁目	1989/1	公共下水道 工事	弥生時代中期～土器	米田敏幸 1989「10. 恩智遺跡（63-399）の調査」『八尾市市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告20 昭和63年度国庫補助事業	市教委
90-282	恩智中町 3丁目	1990/10	個人住宅建 設	弥生時代～土坑・小穴・弥生時代 ～古墳時代～土器・石器	酒 斎 1991「5. 恩智遺跡（90-282）の調査」『八尾市市内遺跡平成2年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告22 平成2年度国庫補助事業	市教委
91-232	恩智中町 2丁目	1991/9 ～10	水道埋設設 置	弥生時代～遺物包含層	酒 斎・吉田野乃 1992「八尾市市内遺跡平成3年度発掘調査報告書II」八尾市文化財調査報告26 平成3年度国庫補助事業	市教委
92-352	恩智中町 1丁目	1992/10	遺構確認調 査	弥生時代～遺物包含層	吉田野乃 1993「15. 恩智遺跡（92-352）の調査」『八尾市市内遺跡平成4年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告27 平成4年度国庫補助事業	市教委
92-640	恩智中町 3丁目	1993/5	専用住宅淨 化槽設置	弥生時代中期～落ち込み状遺構	酒 斎 1994「5. 恩智遺跡（92-640）の調査」『八尾市市内遺跡平成5年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告29 平成5年度国庫補助事業	市教委
95-169	恩智中町 3丁目	1995/8	個人住宅建 設	弥生時代中期～後期～落ち込み 状遺構・弥生土器・須恵器	米田敏幸 1996「2. 恩智遺跡（95-169）の調査」『八尾市市内遺跡平成7年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告33 平成7年度国庫補助事業	市教委
96-408	恩智南町 2丁目	1996/9	遺構確認調 査	弥生時代中期～遺物包含層	藤井淳弘 1997「2. 恩智遺跡（96-408）の調査」『八尾市市内遺跡平成8年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告36 平成8年度国庫補助事業	市教委
96-471	恩智中町 3丁目	1997/2	個人住宅建 設	弥生時代～中世～遺物包含層	藤井淳弘 1998「2-1. 恩智遺跡（96-471）の調査」『八尾市市内遺跡平成9年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告38 平成9年度国庫補助事業	市教委
96-747	恩智中町 3丁目	1997/3	専用住宅淨 化槽設置	縄文時代晚期・弥生時代中期～土 器・石器	藤井淳弘 1998「2-2. 恩智遺跡（96-747）の調査」『八尾市市内遺跡平成9年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告38 平成9年度国庫補助事業	市教委
96-518	恩智南町 2丁目	1997/3	浄化槽設置	弥生時代中期～溝・中世～溝	藤井淳弘 1998「2-3. 恩智遺跡（96-518）の調査」『八尾市市内遺跡平成9年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告38 平成9年度国庫補助事業	市教委
97-38	恩智中町 3丁目	1997/4	専用住宅淨 化槽設置	古墳時代後期以降～遺物包含層	藤井淳弘 1998「2-4. 恩智遺跡（97-38）の調査」『八尾市市内遺跡平成9年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告38 平成9年度国庫補助事業	市教委
96-657	恩智中町 3丁目	1997/6	専用住宅淨 化槽設置	弥生時代中期～遺物包含層	藤井淳弘 1998「2-5. 恩智遺跡（96-657）の調査」『八尾市市内遺跡平成9年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告38 平成9年度国庫補助事業	市教委
97-310	恩智中町 3丁目	1997/8 ～9	個人住宅建 設	弥生時代中期～土坑状遺構・落込 み状遺構	酒 斎 1998「2-6. 恩智遺跡（97-370）の調査」『八尾市市内遺跡平成9年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告38 平成9年度国庫補助事業	市教委
98-54	恩智中町 1丁目	1998/4	浄化槽設置	弥生時代中期～遺物包含層	藤井淳弘 1999「2-1. 恩智遺跡（98-54）の調査」『八尾市市内遺跡平成10年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告40 平成10年度国庫補助事業	市教委
98-278	恩智中町 3丁目	1998/8	専用住宅淨 化槽設置	縄文時代晚期～土器溜り・弥生時 代前・中期～溝・土坑状遺構	吉田野乃 1999「2-2. 恩智遺跡（98-278）の調査」『八尾市市内遺跡平成10年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告40 平成10年度国庫補助事業	市教委
98-395	恩智中町 1丁目	1998/10	個人住宅建 設	弥生時代中期～遺物包含層	藤井淳弘 1999「2-3. 恩智遺跡（98-395）の調査」『八尾市市内遺跡平成10年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告40 平成10年度国庫補助事業	市教委
99-466	恩智中町 3丁目	1999/2	個人住宅建 設	近世以降～土坑・溝（耕作関連）、 中世以前～遺物包含層	酒 斎 2001「1. 恩智遺跡（99-466）の調査」『八尾市市内遺跡平成12年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告44 平成12年度国庫補助事業	市教委
00-398	恩智中町 3丁目	2000/1	個人住宅建 設	古墳時代～弥生時代中期～遺物包 含層	吉田珠己 2002「2. 恩智遺跡（00-398）の調査」『八尾市市内遺跡平成13年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告46 平成13年度国庫補助事業	市教委
05-38	恩智中町 2丁目	2005/5	分譲住宅建 設	弥生時代中期～遺物包含層	原田昌則 2006「4-1. 恩智遺跡（05-38）の調査」『八尾市市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告53 平成17年度国庫補助事業	市教委 研究会
05-254	恩智中町 2丁目	2005/9	分譲住宅建 設	近世～井戸・古墳～弥生時代～遺 物包含層・弥生時代～土坑・溝	高萩千秋 2006「4-3. 恩智遺跡（05-254）の調査」『八尾市市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告53 平成17年度国庫補助事業	市教委 研究会
OJ00-8	恩智中町 2・3丁目	2000/3	公共下水道 工事	弥生時代中期～後期～遺物包含層	岡田清一 2001「I 恩智遺跡第8次調査（OJ2000-8）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』	研究会
OJ01-9	恩智中町 2・3丁目	2000/4	公共下水道 工事	弥生時代中期～後期～遺物包含層	岡田清一 2001「II 恩智遺跡第9次調査（OJ2000-9）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』	研究会
OJ01-11	恩智中町 2・3丁目	2001/11	公共下水道 工事	縄文時代晚期～土器・土偶・弥生 時代中期～土坑・落込み・土器集 積	森本めぐみ 2001「VI 恩智遺跡第11次調査（OJ2001-11）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』	研究会
OJ01-13	恩智中町 3丁目	2002/2 ～3	公共下水道 工事	弥生時代中期～後期～遺物包含層	岡田清一 2001「VII 恩智遺跡第13次調査（OJ2001-13）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』	研究会
OJ04-15	恩智中町 2・3丁目	2004/5	公共下水道 工事	弥生時代中期～中世～土器・石器	岡田清一 2005「VIII 恩智遺跡第15次調査（OJ2001-13）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』	研究会
OJ05-16	恩智中町 1丁目	2005/4 ～6	公共下水道 工事	弥生時代～近世～土器・陶磁器類	岡田清一 2006「IX 恩智遺跡第16次調査（OJ2005-16）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告86』	研究会
OJ05-17	恩智中町 3丁目	2005/6 ～8	公共下水道 工事	縄文時代晚期～近世～土器・石器・ 陶磁器類	岡田清一 2006「X 恩智遺跡第17次調査（OJ2005-17）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告86』	研究会
OJ05-18	恩智中町 3丁目	2005/9 ～12	公共下水道 工事	弥生時代中期～土坑・溝・ピット、 古墳時代～自然河川、中世～落込み	原田昌則 2007「IV 恩智遺跡第18次調査（OJ2005-18）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告98』	研究会

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市恩智南町二丁目地内で行われた公共下水道工事(19-113工区)に伴う調査で、当調査研究会が恩智遺跡内で行った第19次調査である。

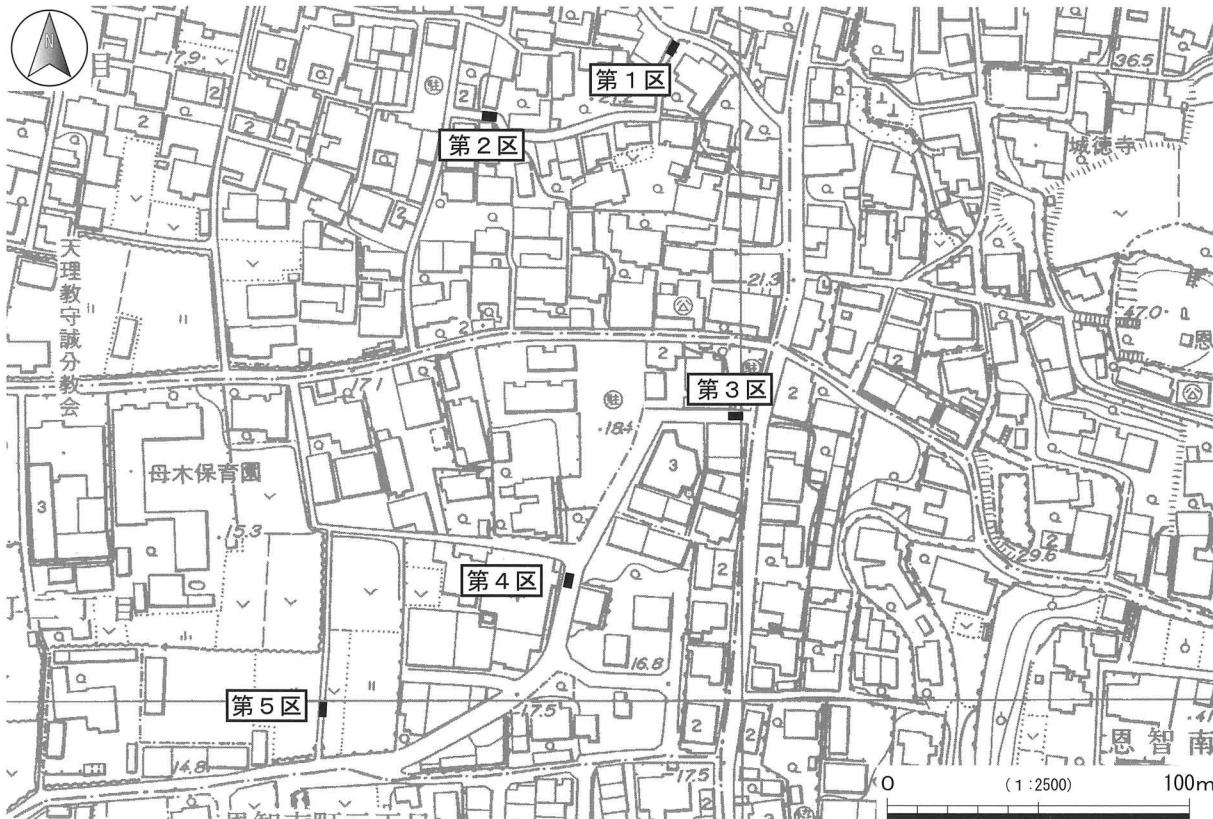
調査地は人孔・小マンホール部分5箇所(規模約1.0~2.0×約1.0m)で、面積は約8.5m²を測る。各調査地点は北から第1~5区と呼称した。このうち、平成19年度に実施した19-1次調査は第3区・第4区の2か所、平成20年度に実施した19-2次調査は第1区・第2区・第5区の3か所である。

掘削は工事掘削深度の現地表(T.P.+15.8~21.9m)下1.3~2.0mまでを人力・機械を併用して平面・断面の調査を行い、遺構、遺物の検出に努めた。第5区については、当初人孔部分での調査を予定していたが、調査前に工事が終了していたため、当初の予定地より約2m北側の小マンホール部分で調査を行った。

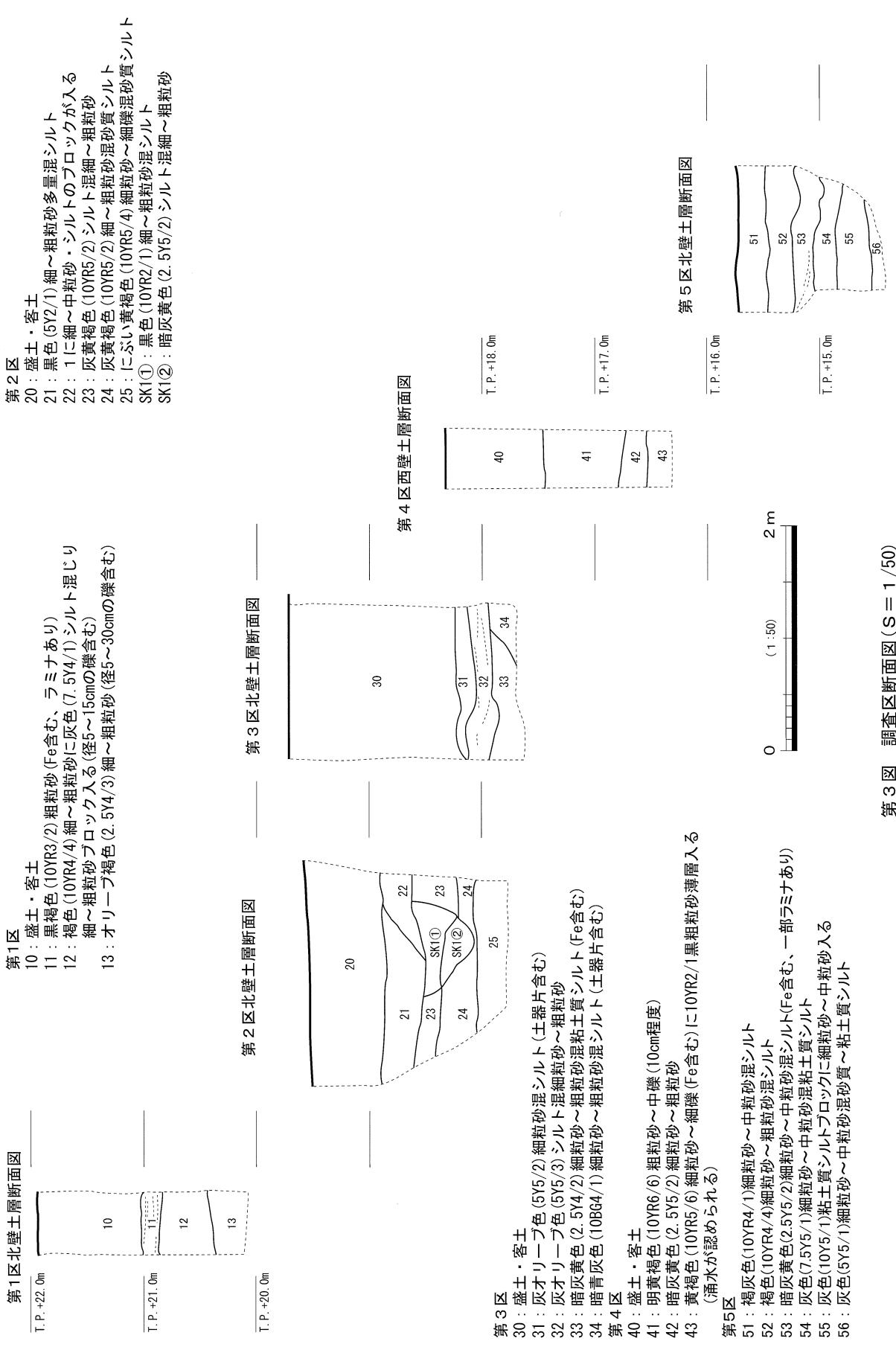
2) 基本層序

調査区は扇状地上から低地部にかけて点在しており、各調査区で対応する層がほとんど見られなかったため、調査区ごとに記述する。第1~4区では、既存の水道管・ガス管・排水溝等の敷設による掘削・削平を受けており、盛土・客土は厚さ0.7~1.5mを測る。

第1区:10層は盛土・客土。以下約1.2mまでの間に3層の地層を確認した。11層は水成堆積層、12・13層は土石流状の河川堆積層と考えられる。



第2図 調査区位置図



第2区：20層は盛土・客土。以下約1.1mまでの間に7層の地層を確認した。21～23層は整地層と考えられる。24・25層は土壤化層で、古墳時代前期～中期に比定できる土師器甕と弥生土器などの細片が出土した。2005年に調査地の西側約10mの地点で行われた第18次調査では、盛土直下で褐灰～灰黄褐色の砂質シルト～中礫混砂質シルトの層(IV-1・2層)が検出されており、24・25層がこれにあたると考えられる。

第3区：30層は盛土・客土。上層は既存の水路により大きく搅乱を受けていたが、以下約0.5mまでの間に4層の地層を確認した。31層は近世の土壤化層で、陶磁器などが出土した。32層は河川堆積層で、一部でラミナがみられる。33・34層は近世以前の耕作土と考えられる。34層からは羽釜の破片が2点出土している。

第4区：40層は盛土・客土である。41～43層は土石流状の河川堆積層と考えられる。

第5区：51層は現耕土。52～56層は水成堆積層である。53～55層では土師器の細片が少量含まれる。

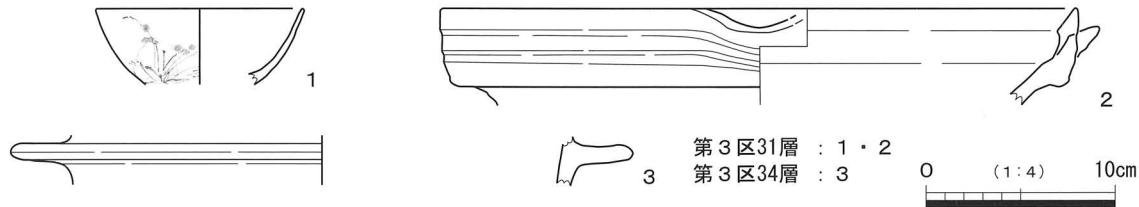
3) 検出遺構と出土遺物

第2区で土坑1基(SK1)を検出した。SK1は第2区23層上面(T.P.+18.7m前後)で検出された。調査区北壁断面で確認し、調査区外へ広がるため全形は不明で溝状遺構の端の可能性もある。埋土には極少量の土師器の細片を含むが、時期を特定できるものはなかった。時期については23層出土の遺物の時期から近世以降と考えられる。

出土遺物は、各調査区から土器類が出土したが、ほとんどが細片のため図化には至らなかった。1は第3区31層から出土した。肥前系の染付碗で、外面に草花文が施される。18世紀に比定される。2は第3区31層から出土した。陶器擂鉢で、片口をもつ。3は第3区34層から出土した土師器羽釜で、鍔部のみ残存する。詳細な時期等は不明である。この他に、図化には至らなかったが、第1区13層からローリングを受けたサヌカイトの石核(図版2-4)が出土している。

3. まとめ

今回の調査は調査区が小さく点的なものであったが、恩智遺跡南部の生駒山地西麓に形成された扇状地上と低地部にかけての比較的広範囲にわたって行われ、各調査区で異なる様相が確認できた。調査地北側の扇状地上に立地する第1・2区では、第1区で土石流状の堆積層、第2区で近世以降の土坑及び土壤化層と古墳時代前期～中期の遺物を含む土壤化層を検出した。第3区は扇状地上と低地部の間にあたる傾斜地で、上層は大きく搅乱を受けていたが、近世以前の河川堆積層と土壤化層が確認できた。現地表が近世の土壤化層より約1.5m高くなっていることから、周辺は調査区北から東側にかけて広がる扇状地から土が流れ込んできたか、近世以後に盛土がさ



第4図 出土遺物実測図

れた可能性がある。第4区は扇状地南側の谷地にあたる箇所で、調査地より北・東側の扇状地上部から多量の土が流れ込んできたと考えられる土石流状の河川堆積層が確認できた。第5区は低地部にあたり、現耕土より下層は礫をほとんど含まない水成堆積層で、一部ブロック状になっている箇所があることから、扇状地上から流れてきた土が暫時堆積した層と考えられる。

また、今回の調査では、第2区を除く調査区では近世以前の遺物・遺構はほとんど検出されなかったため、調査地周辺は近世以降まで居住域として利用されなかつたと考えられる。しかし、扇状地上から流れた土が厚く堆積した地点もあり、近世以前の遺構面まで達しなかつた可能性もある。

参考文献

- ・原田昌則 2005 「IV 恩智遺跡第18次調査（O J 2005-18）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告98』
財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』



1区調査地全景(北から)



1区北壁



2区調査地全景(西から)



2区北壁東側



2区北壁西側



3区調査地全景(西から)



3区北壁



4区調査地全景(北から)



4区西壁



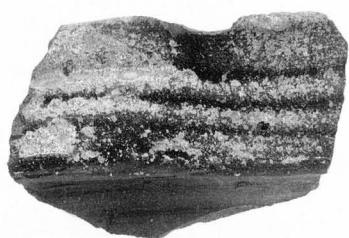
5区調査地全景(西から)



5区東壁



3区31層出土遺物(1)



3区31層出土遺物(2)



3区34層出土遺物(3)



1区13層出土遺物(4)

III 太子堂遺跡第12次調査(T S 2008-12)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市南太子堂二・三丁目地内で実施した公共下水道工事(20-24工区)に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する太子堂遺跡第12次調査(T S 2008-12)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成20年10月24日～平成20年10月31日(実働4日)にかけて、米井友美を調査担当者として実施した。調査面積は約26.2m²である。
1. 現地調査においては、梶本潤二・中野一博・中浜輝志・西出一樹の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成22年3月に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、米井が行った。

本 文 目 次

1. はじめに.....	13
2. 調査概要.....	14
1) 調査の方法と経過	14
2) 基本層序	14
3. まとめ.....	15

III 太子堂遺跡第12次調査 (TS 2008-12)

1.はじめに

太子堂遺跡は、八尾市の南西部に存在する古墳時代前期から室町時代に至る複合遺跡で、地理的には、旧大和川の主流であった平野川の自然堤防上に位置している。現在の行政区画では太子堂三丁目～六丁目、東太子二丁目、南太子堂一丁目～六丁目がその範囲とされる。当遺跡周辺には、北に跡部遺跡、北西に亀井遺跡、北東に植松遺跡、東に植松南遺跡、南に木の本遺跡が存在している。

当遺跡周辺では、遺跡南西部と当遺跡北東に隣接する植松遺跡内を中心に大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会が発掘調査を実施しており、古墳時代前期から室町時代の遺構・遺物が検出され、集落とその周辺に展開する生産



第1図 調査地周辺地図

表1 周辺の調査地一覧表

略号	遺跡名	所在地	調査機関	面積 (m ²)	主な成果	関連文献
TS97-7	太子堂	南太子堂4・5丁目地内	研究会	94	平安時代後期の井戸・土坑、平安時代～中世遺物包含層	西村公助 2000「X IV太子堂遺跡第7次調査 (TS97-7)」 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 66』
TS98-8	太子堂	南太子堂5丁目地内	研究会	384	古墳時代中期埴輪、奈良～鎌倉時代の井戸・土坑・溝・水田等	高萩千秋 2000「X V太子堂遺跡第8次調査 (TS98-8)」 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 66』
TS98-9	太子堂	南太子堂3丁目地内	研究会	54	古墳時代前期・平安時代の遺物包含層、埋没河川「古平野川」を検出	成海佳子 2000「X太子堂遺跡第9次調査 (TS98-9)」 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 65』
TS99-10	太子堂	南太子堂4・5丁目地内	研究会	132	古墳時代河川、平安時代前期遺物包含層、平安時代後期土坑・溝・土器溜	森本めぐみ 2001「X V太子堂遺跡第10次調査 (TS99-10)」 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 67』
TS02-11	太子堂	南太子堂3丁目地内	研究会	33	平安時代前期耕作溝	西村公助 2005「X V太子堂遺跡第11次調査 (TS2002-11)」 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 85』
TS08-12	太子堂	南太子堂2・3丁目地内	研究会	26.2		本書
府センター-2005	植松	植松町3・8丁目地内	大阪府文化財センター	1488	弥生時代後期～古墳時代初頭の溝、古墳時代後期～平安時代初頭の流路、中世～近世島畠・井戸・溝	川瀬貴子・降矢哲男 2007「植松遺跡」(財)大阪府文化財センター調査報告書 164集

域の存在が明らかになっている。今回の調査地は遺跡東部にあたり、調査地より北東から西にかけては古平野川の推定地とされている。

これらのことから、今回の調査では古墳時代から室町時代の遺構・遺物と、古平野川関連の遺構の存在が想定された。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市南太子堂二・三丁目地内で行われた公共下水道工事(20-24工区)に伴うもので、当研究会が太子堂遺跡内で実施した第12次調査にあたる。

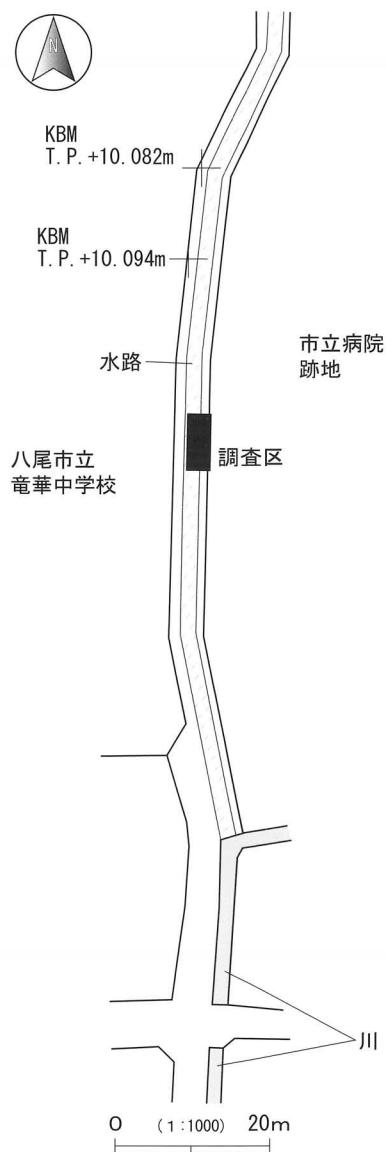
調査区は南北7.6m、東西3.2mの鋼矢板で囲まれた立坑部分で、竜華中学校と旧八尾市立病院跡地の間を通る道路上に位置する。調査で使用した標高は、調査区北側に設置されていた仮ベンチマーク(T.P.+10.094m)を使用した。

調査は、現地表下1.1~2.1m前後の遺物包含層が対象であったが、調査区上に設置されていた水路によって対象部分のほとんどが大きく搅乱を受けていたため、平面的な調査は行えなかった。そのため、比較的搅乱の程度の低い東壁付近で断面調査を行い、工事掘削の終了する現地表下約4.7m(T.P.+5.3m)まで機械・人力を併用して掘削し、随時、写真撮影・断面図作成などの記録保存作業を行った。調査の結果、既往の調査で確認されている古平野川に対応すると思われる地層を検出したが、遺構・遺物は検出されなかった。

2) 層序

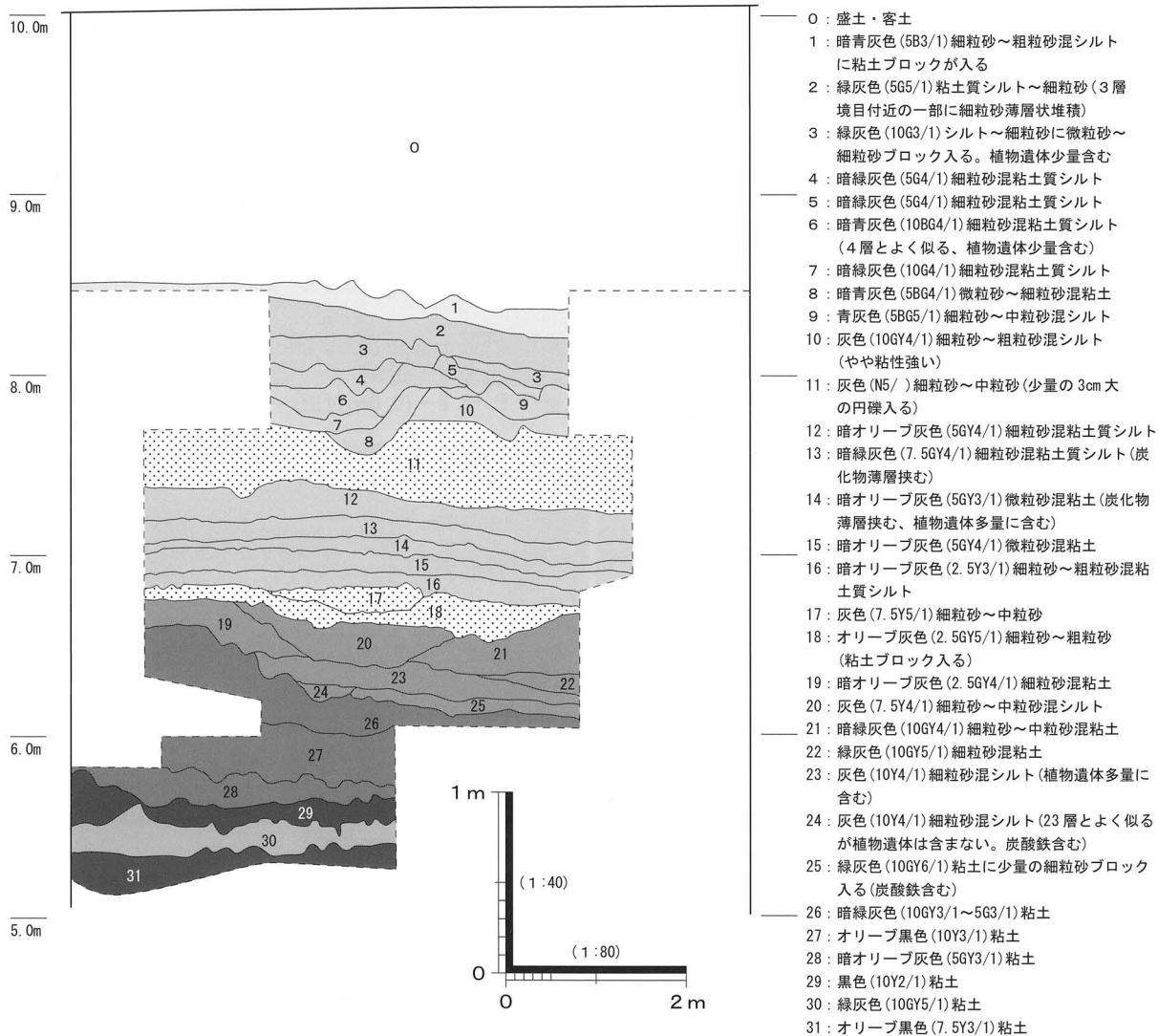
現地表(T.P.+10.0m)下1.5~2.0m前後までは現代の盛土及び既設水路による搅乱である。現地表下1.5~4.7m(T.P.+5.3~8.5m)までの間で31層を確認した。

1層はシルトに粘土ブロックが混じる土壤化層で、近世以降の作土層と考えられる。2~10層は水成堆積層で、3・5層は植物遺体を少量含む。11層は河川堆積層である。12~16層は水成堆積層で、13・14層は炭化物の薄層を複数層挟み、14層は多量の植物遺体を含む。17・18層は河川堆積層で、18層下半は攪拌を受けており、19・20・21層と思われる粘土ブロックが少量混じる。19~26層は水成堆積層で、23層は多量の植物遺体を含む。24・25層には炭酸鉄が少量含まれるほか、25層は一部に細粒砂ブロックが少量入る。27・28層は粘性の強い土壤化層である。29・31層は黒~オリーブ黒色の粘土で、間に30層の緑灰色の粘土を挟む。遺物等が検出されなかつたため、2~28層は時期等の詳細は不明である。29~31層は、調査地西で行われた第9次調査と調査地北東で2005年に大阪府文化財センターによって行われた調査で検出されている弥生時代の遺構面とされる黒色粘土層と緑灰色シルトまたは粘土の層に相当すると考えられる。



第2図 調査区位置図

III 太子堂遺跡第12次調査(TS2008-12)



第3図 調査区断面図

3.まとめ

今回の調査では、1層の近世作土層と、2層以下の水成堆積層と河川堆積層を検出した。調査地周辺は、北東から西へ古平野川が流れていたと推定されており、2層から25層については古平野川の沿岸付近で流水状態と湿地状態が繰り返され堆積したものと考えられる。26層については、北側が高くなっている、古平野川やその支流の自然堤防の一部の可能性がある。27層以下は、河川の氾濫等の痕跡はみられず、弥生時代以前の比較的安定した土壤化層と考えられる。

参考文献

- ・阪田育功 1984「第3節 河内平野の形成と河川の変遷－長瀬川を中心に－」『佐堂（その2）－I』財団法人大阪文化財センター
- ・川瀬貴子 降矢哲男 2007『植松遺跡』（財）大阪府文化財センター調査報告書164集
- ・成海佳子 2000「X 太子堂遺跡第9次調査（TS98-9）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』



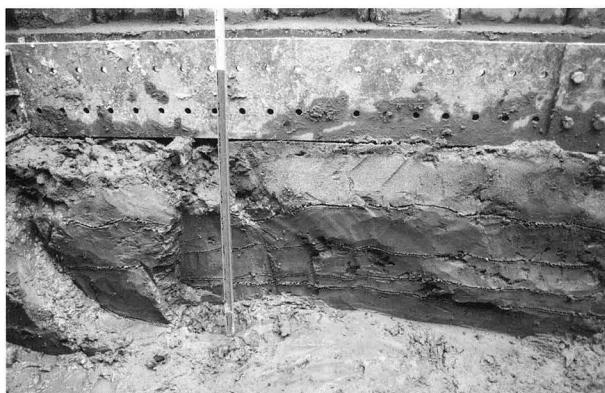
調査地全景(北東から)



東壁(T.P.+8.8~10.0m付近)



東壁(T.P.+7.5~8.8m付近)



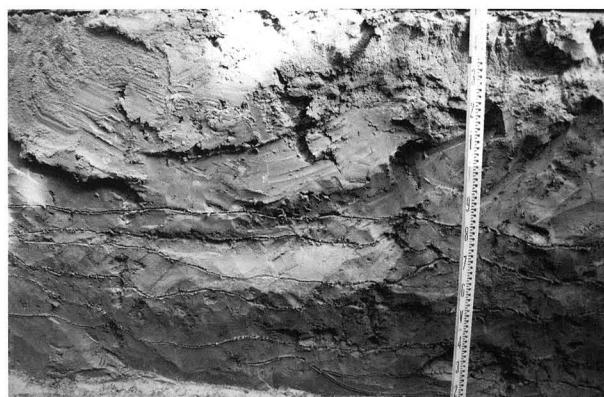
東壁(T.P.+6.7~7.5m付近)



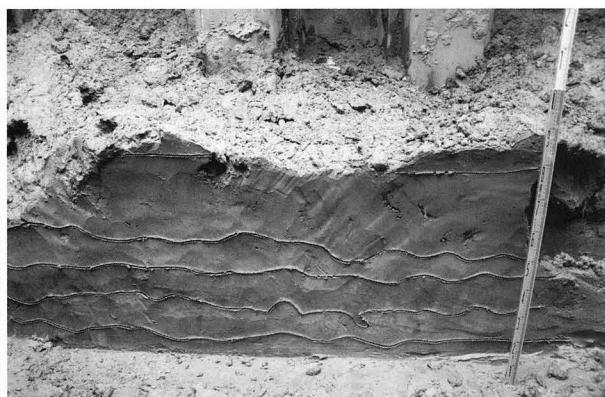
東壁(T.P.+6.7~7.5m付近)



東壁(T.P.+6.0~6.7m付近)



東壁(T.P.+6.0~6.7m付近)



東壁(T.P.+5.1~6.0m付近)

IV 西郡廃寺第5次調査(N K T 2008-5)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市泉町三丁目地内で実施した公共下水道工事(20-4工区)に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する西郡廃寺第5次調査(NKT2008-5)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成20年12月25日～平成21年1月7日(実働3日)にかけて、木村健明・坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約28.5m²である。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成22年3月に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、遺物実測－飯塚直世・芝崎和美・中野一博・中村百合・村井俊子・若林節子、遺物トレース－市森千恵子、遺構トレース－木村が行った。
1. 本書の執筆・編集は木村が行った。

本　文　目　次

1. はじめに.....	17
2. 調査概要.....	18
1) 調査の方法と経過	18
2) 層序	19
3) 遺構と遺物	22
3. まとめ.....	23

IV 西郡廃寺第5次調査 (NKT2008-5)

1. はじめに

西郡廃寺は八尾市北西部の泉町二・三丁目、幸町一・三・四・六丁目に所在し、東西0.5km、南北0.8kmの範囲に広がる弥生時代後期以降の複合遺跡である。

地理的には旧大和川水系の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地上に位置する。周辺の遺跡には西郡廃寺を含む遺跡として西郡遺跡があり、また西に山賀遺跡、南に萱振遺跡が隣接する。

当遺跡は当初の遺跡名が、萱振遺跡(萱振A遺跡)・西郡廃寺跡とされていたが、その後、西郡廃寺遺跡として範囲が拡張された。さらに西郡廃寺と変更がなされ、現在に至っている。第1図

表1 周辺の調査一覧表

番号	調査名	調査主体	調査年	主な遺構・遺物	文献
1	萱振遺跡 1984年度	市教委	1984.10	弥生後期-土器	市教委 1985『八尾市文化財紀要I』
	萱振遺跡 K F 84 - 1	研究会	1984.11 ~ 12	弥生後期-井戸・土坑・溝 古墳前期-土器・中期-溝、後期-土坑 中世-井戸・土坑・溝、建物	研究会 1987『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告 13
2	萱振遺跡 61年度	市教委	1986.9 ~ 10	弥生後期-土器集積 古墳前期-土坑 古代-土器	市教委 1987『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告 15
3	萱振遺跡 K F 88 - 6	研究会	1988.6 ~ 8	弥生後期-焼失住居・井戸 古墳前期-土器 特殊器台 平安中期-井戸 中世-集落 近世-井戸	研究会 1996『萱振遺跡』(財)八尾市文化財調査研究会報告 52
4	萱振遺跡 K F 88 - 7	研究会	1989.2 ~ 3	古墳前期-溝・柱穴 古墳後期-井戸・建物	
5	西郡廃寺 90 - 005	市教委	1990.6	弥生後期-土器	市教委 1991『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告 22
6	萱振遺跡 90 - 287	市教委	1990.8	弥生後期-中世包含層	市教委 1991『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告 23
7	萱振遺跡 K F 90 - 9	研究会	1990.11	弥生後期-溝 古墳前期-土坑	研究会 1991『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会報告 32
8	萱振遺跡 K F 90 - 10	研究会	1990.11	河川堆積	
9	萱振遺跡 92 - 359	市教委	1992.10	弥生後期-中世包含層	市教委 1993『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告 28
10	萱振遺跡 K F 92 - 13	研究会	1993.2 ~ 3	弥生後期-堅穴住居 古墳前期-土坑・溝	研究会 1996『萱振遺跡』(財)八尾市文化財調査研究会報告 52
11	萱振遺跡 93 - 241	市教委	1993.8	弥生後期-土器 古墳前期-土坑 古代-土器 近世-溝	市教委 1994『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告 30
	萱振遺跡 K F 94 - 16	研究会	1994.5 ~ 8	古墳前期-井戸・溝・土坑 古墳後期-溝・土坑 古代-井戸 中世-井戸・建物・溝 近世-井戸・溝	研究会 2007『(財)八尾市文化財調査研究会報告 95』
12	西郡廃寺 96 - 446	市教委	1996.12 ~ 1997.1	弥生後期-溝 古墳前期-土坑・溝・柱穴	市教委 1998『八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告 39
13	西郡廃寺 99 - 146	市教委	1999.7	古代-土坑	市教委 1999『八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告 42
	西郡廃寺 NKT 99 - 1	研究会	1999.10 ~ 11	古墳前期-土坑 古代-建物跡・土坑・溝	市教委・研究会 2000『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告1』
14	西郡廃寺 2002 - 367	研究会	2003.8	古代-土坑	
15	西郡廃寺 2003 - 89	研究会	2003.6	中世-近世包含層	
16	西郡廃寺 NKT 05 - 2	研究会	2005.9 ~ 11	中世-溝・瓦	研究会 2007『(財)八尾市文化財調査研究会報告 95』
17	西郡廃寺 2006 - 15	研究会	2006.4	近世-井戸	
18	西郡廃寺 2006 - 51	研究会	2006.5	中世-耕作土層を確認	
19	西郡廃寺 2006 - 324	研究会	2006.11	近世頃-湿地性堆積を確認	
20	西郡廃寺 2006 - 216	研究会	2006.11	古墳後期-溝 中世-落込み	
21	西郡廃寺 2006 - 314	研究会	2006.11	古代-溝・土坑	
	西郡廃寺 NKT 06 - 4	研究会	2007.1 ~ 4	古墳前期-溝・土坑 後期-土坑・溝 古代-土坑・井戸 中世-井戸・土坑 近世-井戸・溝	研究会 2007『平成18年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』
22	西郡廃寺 2006 - 190	研究会	2007.1	中世-土坑	市教委 2008『八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告 57
	西郡廃寺 NKT 06 - 3	研究会	2007.1 ~ 2	古代-中世-土器	研究会 2009『(財)八尾市文化財調査研究会報告 127』
23	西郡廃寺 2007 - 44	研究会	2007.5	中世-近世包含層	
24	西郡廃寺 2007 - 184	研究会	2007.10	中世-耕作土	
25	西郡廃寺 2007 - 334	研究会	2007.12	古代-瓦 中世-土器	
26	西郡廃寺 NKT 08 - 5	研究会	2008.12 ~ 2009.1	古墳前期-ピット 古墳後期-土器 古代-土器 中世-溝 時期不明-ピット	本書

は現在西郡廃寺とされている範囲であるが、調査時の名称が萱振遺跡である地点も多く存在する。当遺跡内の発掘調査は八尾市教育委員会(以下、市教委)・財団法人八尾市文化財調査研究会(以下、研究会)が行っている。

以下、現在遺構の確認されている弥生時代後期以降から時期ごとに遺跡の概要を記す。

弥生時代後期 これまでに遺跡中央～南東部の1・2・3・5～7・9～12で遺構・遺物を検出している。特に3で井戸と焼失豎穴住居跡2棟、10で豎穴住居跡1棟、1で井戸・土坑・溝などを検出しており、この辺りに集落が存在したことがわかっている。

古墳時代前期 弥生時代後期に続いて多くの地点で遺構・遺物を検出している。西部の4・21、北部の13、南東部の1～3・6・7・9～12の各地点である。集落は西部と南東部の2ヶ所に存在したようである。大部分の遺構は土坑や溝であり、その性格は明確ではないが、特筆される遺物に3で出土した都月型特殊器台がある。

古墳時代中期～後期 この時期は前代までと異なり、遺構が著しく希薄であり、中期は1で溝を検出している程度である。後期は、1・4・11・20・21で土坑・溝などの遺構を検出している。特に4では井戸・掘立柱建物を検出しており、集落の存在が確認されている。

古代 この時期は西郡廃寺が創建されたと考えられている時期である。遺構・遺物も前代より増加しており、2・3・11・13・14・16・21・22・25で確認している。特に13・14では掘立柱建物跡や土坑・井戸などが確認され、西郡廃寺創建後の時期にあたることから、寺との関連が指摘されている。また16・25で奈良時代の瓦が出土しており、従来指摘されている通り、西郡天神社の近辺に西郡廃寺が所在したと考えられる。

中世 中世は広範囲で遺構・遺物が確認されている。1・3・11・15・16・18・20～25である。その内、1・3・11と21・22で集落関連の遺構を検出しており、東西2ヶ所に集落が存在したようである。16は古代の瓦を含む溝を検出しており、寺に関わる遺構と考えられる。18・24では耕作土を確認しており、寺に隣接して耕作地が広がっていたようである。

近世 11・21・17で溝や井戸などを確認している。周辺は耕作地化していた可能性が高い。

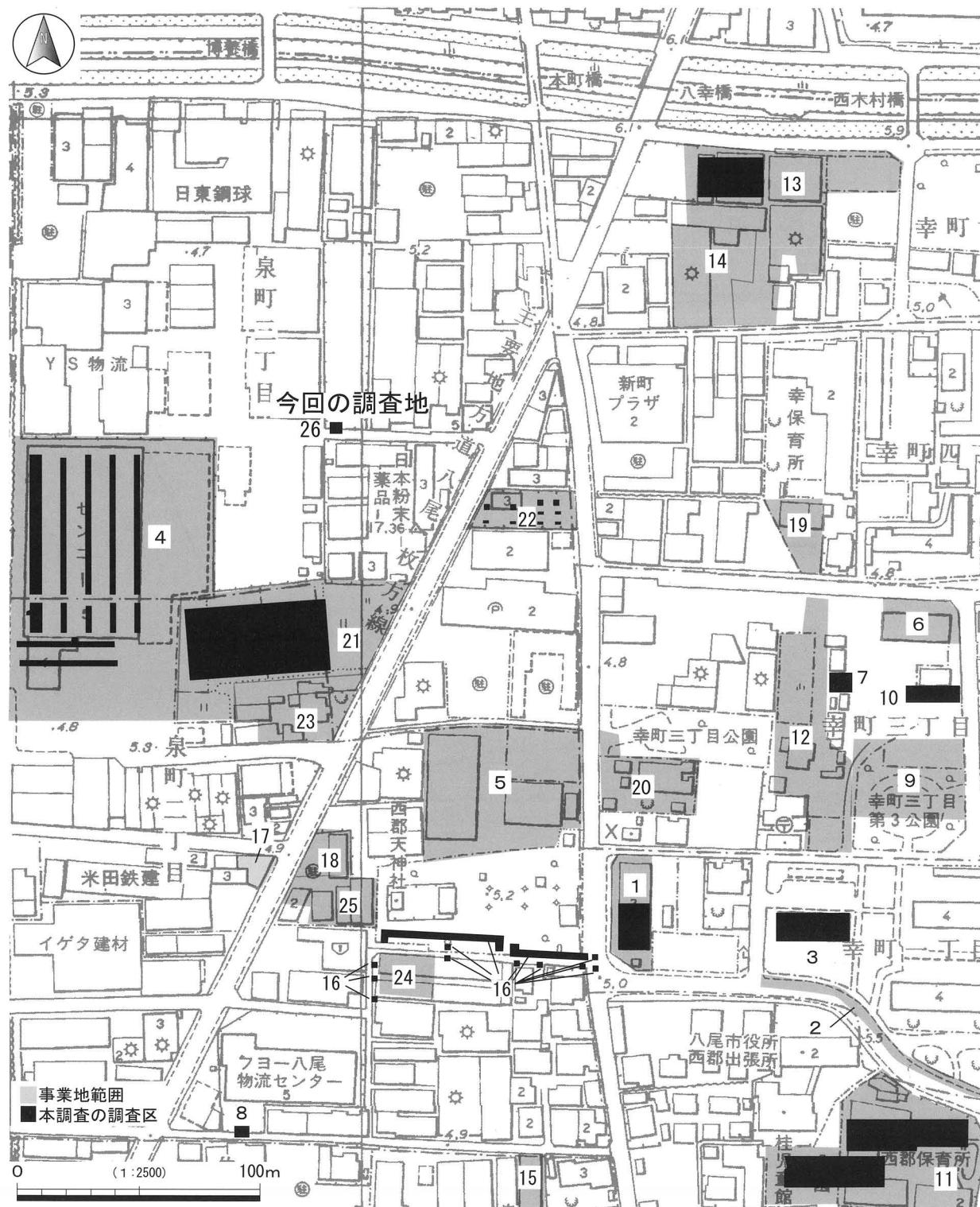
2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市泉町三丁目地内で計画された公共下水道工事(20-4工区)に伴うものである。調査地は主要地方道八尾枚方線から西側に入る細い道路の突き当たりである。この道路は物流会社への進入路で、日中は大型車の出入りが頻繁なため、調査は夜間に実施することとなった。調査区は、発進立坑設置に伴って掘削される部分である。調査区の平面形は東西5.75m・南北4.95mの四角形を呈し、面積は約28.5m²を測る。

発掘調査は地表下1.0mまで機械掘削を行い、覆工板を設置した後、当初は以下1.0mに対して上下25cmは人力掘削、間50cmは機械掘削を行う予定であった。しかし、下部の人力掘削部分は、中間の機械掘削部分から連続する砂層の堆積であったため機械掘削のみを行った。

また、工事掘削深度までの下層確認調査も行ったが、掘削深度(T.P.+1.0m)まで砂層が連続していることを確認した。



第1図 調査地周辺図

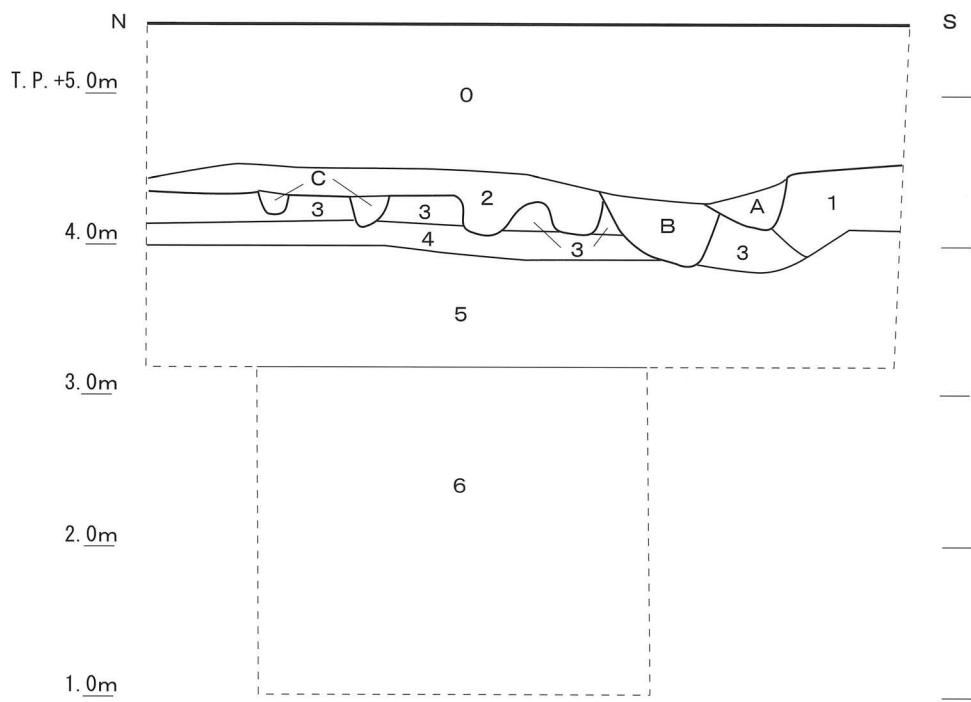
2) 層序

現地表(T.P.+5.5m)以下1.0mまでは現代の盛土及び、水道管敷設時の搅乱(0層)である。現地表下2.0m(T.P.+3.0m)までの間で6層の層序を確認した。

1層はブロック状を呈する粗粒砂混じり粘質シルト層である。若干の遺物を含んでおり、遺構

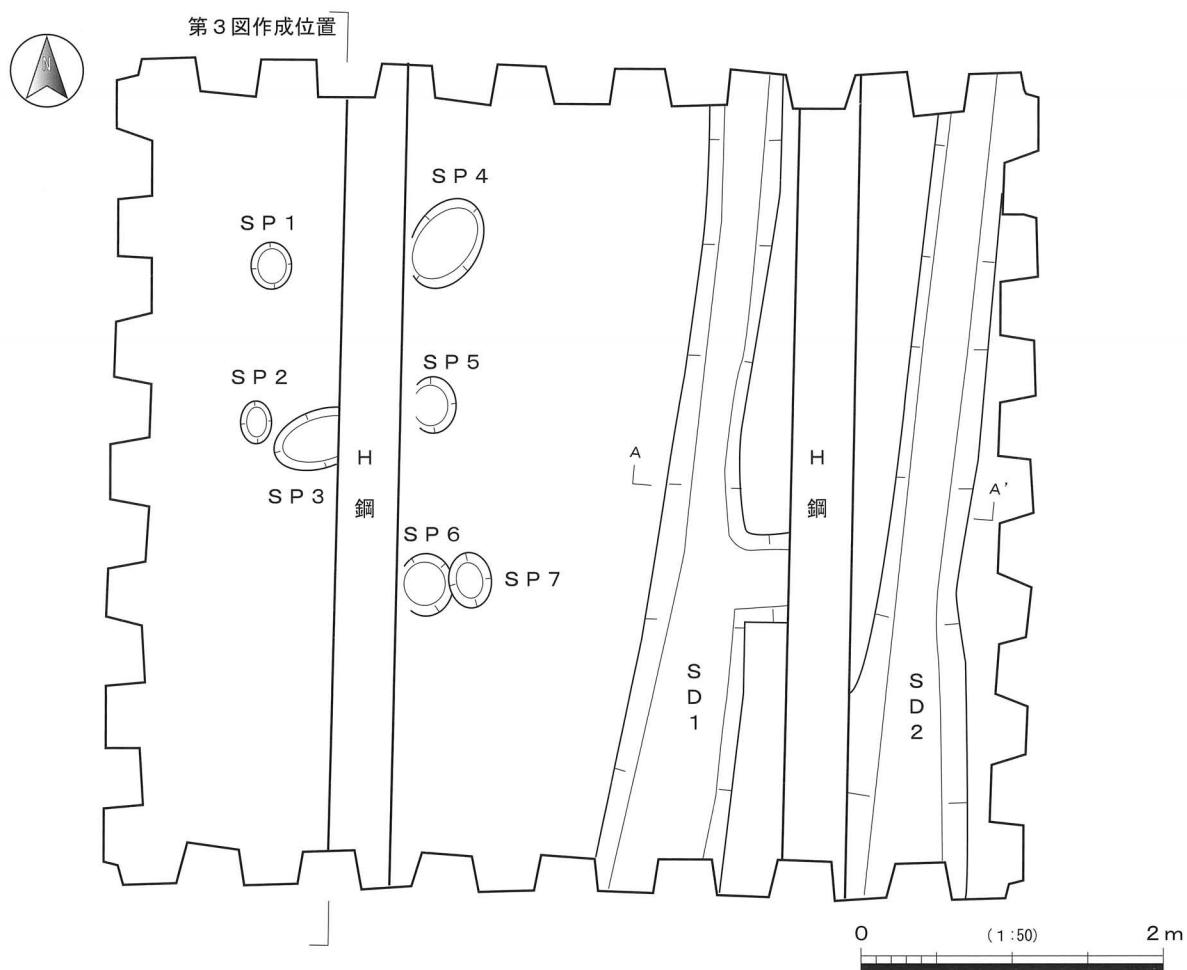


第2図 調査区位置図

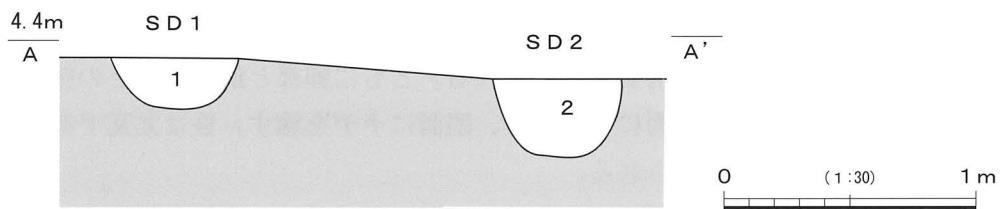


- | | |
|--|---|
| 0 : 盛土・攪乱 | A : 褐灰色(10YR5/1)粗粒砂混じり粘質シルト(遺構埋土) |
| 1 : 灰黄色(2.5Y6/2)粗粒砂混じり粘土(ブロック状を呈する) | B : 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト(遺構埋土) |
| 2 : 灰黄褐色(10YR5/2)粗粒砂混じり粘質シルト(包含層・遺構埋土) | C : 褐灰色(10YR5/1)粘質シルト
(3層のブロック土を含む・遺構埋土) |
| 3 : にぶい黄橙色(10YR7/4)にぶい黄橙色粘質シルト | |
| 4 : 灰色(5Y6/1)粗粒砂～礫(直径2cm大を含む) | |
| 5 : 灰色(5Y5/1)微粒砂～粗粒砂 | |
| 6 : 灰黄色(2.5Y7/2)微粒砂～礫 | |

第3図 調査区断面図



第4図 遺構平面図



1. 灰褐色(7.5YR5/2)粘質シルト 2. 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト

第5図 SD 1・2断面図

表2 ピット一覧表

遺構名	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	埋土	出土遺物
S P 1	円形	30	25	11	褐灰色(7.5YR4/1)粘質シルト	
S P 2	円形	26	16	5	灰褐色(7.5YR5/2)粘質シルト	
S P 3	円形	48以上	38	30	灰黄褐色(10YR5/2)粘質シルト	土師器・須恵器
S P 4	円形	60	46	5	灰黄褐色(10YR5/2)粘質シルト	土師器(庄内式)
S P 5	円形	38	20以上	10	黒褐色(10YR3/2)粘質シルト	
S P 6	円形	44	20以上	20	灰色(5Y4/1)粘質シルト	土師器
S P 7	円形	34	24	11	黒褐色(10YR3/2)粘質シルト	土師器

の可能性もある。2層は第1面上に堆積していた包含層で、一部の遺構埋土にもなっている。3層は上面が第1面のベース(T.P.+4.3m)となる層である。7層以下は河川堆積層である微粒砂～礫である。遺物は含んでいない。

3) 遺構と遺物

盛土及び搅乱を機械掘削によって除去した後、人力掘削によって2層を除去し、3層上面において精査をおこなったところ、溝2条(SD1・2)とピット7個(SP1～7)を検出した。調査区の北側は、機械掘削が深く及んでしまったため、遺構の残存状態は良くなかったが、H鋼の下に設定した畦による土層観察の結果、断面で2個のピットを確認した。本来は更に数基の遺構が存在したようである。

SP1～7 いずれも調査区西側で検出した。SP7がSP6を切る以外に切り合いは認められない。ピットの詳細は表2にまとめた。出土遺物の内、1を図示した。

1はSP4出土の古墳時代前期の土師器甕である。口径27.6cmを測る大形の甕である。口縁端部は面を成す。生駒西麓産の胎土をもつ。

SD1・2 ともに南北方向に延びる溝である。南北両側とも調査区外に延びる。ともにほぼ並行して延びるが、SD1は途中でSD2の方向に分岐する。しかし、SD2側ではその延長は確認できなかった。調査できなかったH鋼の下で収束する可能性も考えられる。

SD1は幅50～80cm・深さ20cmを測る。断面形は「U」字状を呈する。遺物は古墳時代の須恵器、中世の土師器・瓦器・須恵質土器・瓦質土器・平瓦が出土した。この内、2～9を図示した。

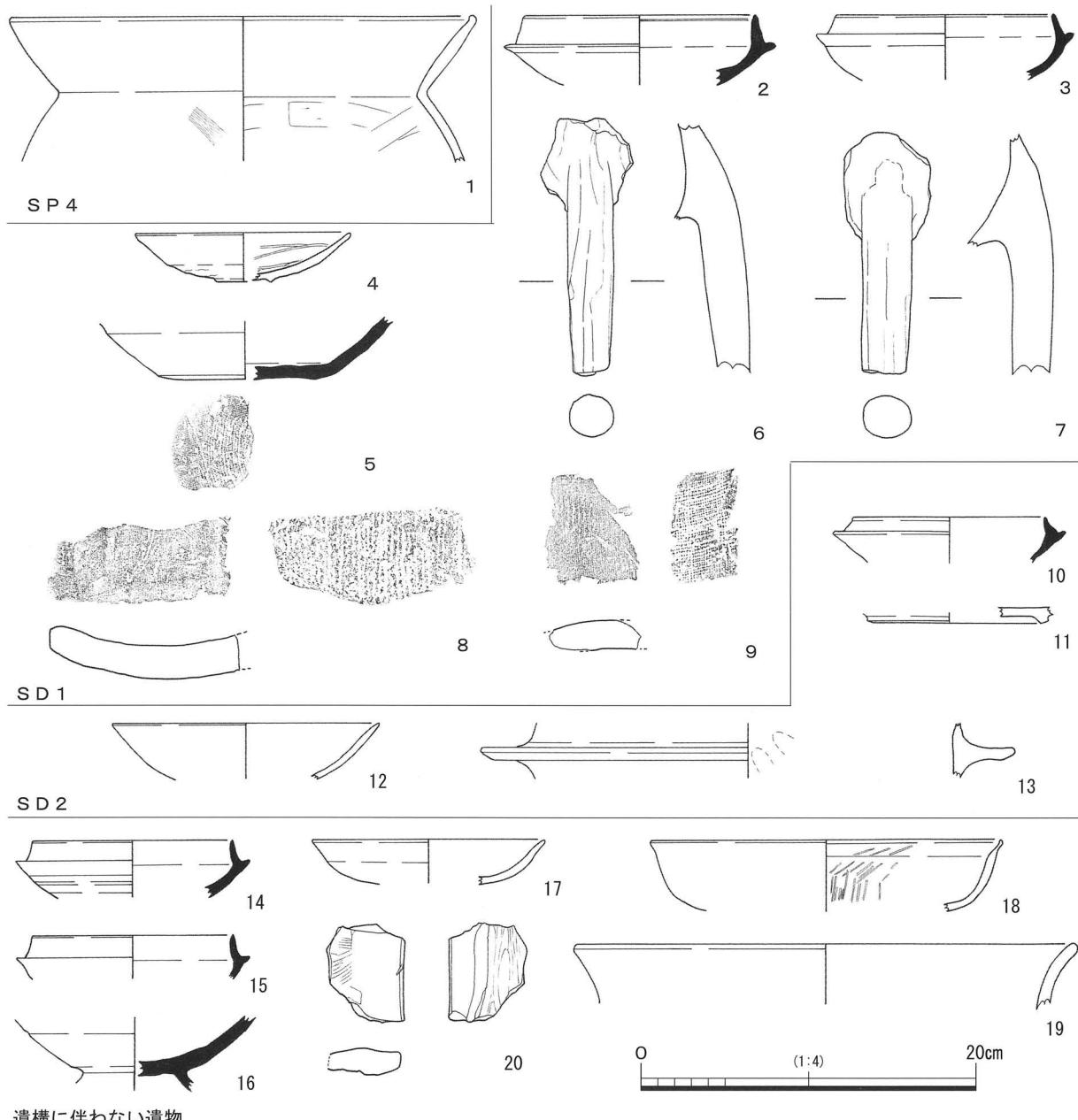
2・3は須恵器杯身である。ともにたちあがりは内傾し、端部は丸く收める。受部は短く水平に延びる。TK10型式古段階である。4は瓦器椀である。高台はかろうじて痕跡をとどめる程度に形骸化する。内面に粗いミガキを施す。和泉型IV-2期である。5は東播系須恵質土器鉢の底部である。底部外面に回転糸切り痕跡が認められる。内面はよく使用されており、摩滅する。6・7は瓦質土器三足鍋の脚部である。脚部の調整はともに面取りを施している。しかし、厚みや色調が微妙に異なることから、別個体と思われる。ともに脚部と鍋の体部との接合部周辺に煤が付着する。8は平瓦である。凸面に繩タタキ、凹面にナデを施す。9は丸瓦である。凸面はナデを施し、凹面は布目痕跡が認められる。

SD2は幅50～70cm以上・深さ30cmを測る。断面形は「U」字状を呈する。遺物は古墳時代の須恵器、中世の土師器・瓦器・白磁・瓦が出土した。この内、10～13を図示した。

10は古墳時代の須恵器杯身である。たちあがりは断面三角形状を呈し、端部は丸く收める。受部は斜め上方に短く延びる。TK10型式新段階である。11は土師器椀である。断面三角形状の低い高台をもつ。12は黒色土器A類椀である。13は土師器羽釜である。鍔は短く水平に延びる。体部は上下とも欠損するが、口縁部側がやや外反するようであり、河内A形と思われる。生駒西麓産の胎土をもつ。図化できなかったが、21・22(図版2)は白磁碗の口縁部片である。いずれも玉縁をもっており、白磁碗IV類である。

遺構に伴わない遺物 機械掘削時及び遺構検出時に主に2層中から出土した遺物である。古墳時代の須恵器、古代の土師器、中世の土師器・瓦器が出土した。この内、14～20を図示した。

14・15は須恵器杯身である。ともにたちあがりはやや外反して丸く收める。受部は短く水平に延びる。TK10型式古段階である。16は須恵器壺である。高台端部を欠損する底部である。内外



第6図 出土遺物実測図

面に回転ナデを施す。17・18は土師器杯である。17は口縁部にヨコナデを施す。18は口縁端部が外反し、端部は内面に肥厚する。19は土師器羽釜である。外反する口縁部で、河内A型と思われる。生駒西麓産の胎土をもつ。20は土師器竈である。焚き口部分の破片で、内面は火を受けて褐灰色に変色する。生駒西麓産の胎土をもつ。

3. まとめ

今回の調査は、小面積でかつ夜間調査という条件の下で実施したが、古墳時代前期及び中世の遺構を検出することができた。ピットは出土遺物が少ないため、時期は確定しがたいが、SP 4は出土遺物の年代から古墳時代前期と考えられる。2条検出した溝は出土遺物の傾向が似ており、

掘削された時期が近い可能性がある。南北方向に延びていることから、将来延長部分を調査する機会があれば、その性格も明らかにできよう。また遺構は確認できなかったが、古墳時代中期～古代の遺物が出土しており周辺にこの時期の遺構が存在する可能性がある。

参考文献

- 菅原正明 1983 「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店



調査地遠景(東から)



調査地近景(西から)



SD 2 検出状況(南から)



SD 2 完掘状況(南から)



SD 1・SP 4~7 検出状況(南から)



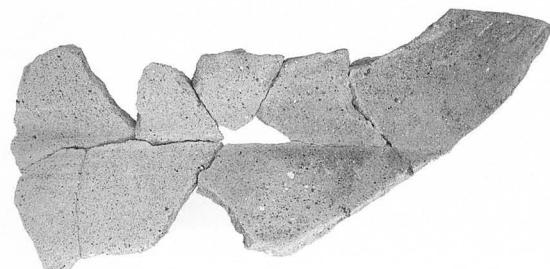
SD 1・SP 4~7 完掘状況(南から)



SP 1~3 検出状況(南から)



南北断面(北西から)



1

SP 4出土遺物

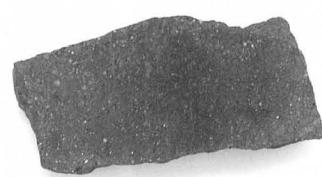


4

SD 1出土遺物



2



8



5



6



7

SD 1出土遺物



13



12



21

22



16



20

SD 2出土遺物・
遺構に伴わない遺物

V 東弓削遺跡第16次調査(HY2007-16)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市八尾木東三丁目地内で実施した公共下水道工事(19-23工区)に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する東弓削遺跡第16次調査(H Y2007-16)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成20年1月15日から3月14日(実働6日)にかけて、米井友美を調査担当者として実施した。調査面積は約57.8m²である。
1. 現地調査においては、市森千恵子・中野一博・村井厚三の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、随時実施し、平成22年3月に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、遺物実測－永井律子、遺物図面トレース－市森、図面レイアウト・トレース－米井が行った。
1. 本書の執筆・編集は米井が行った。

本　文　目　次

1. はじめに.....	27
2. 調査区の調査概要.....	28
1) 調査の方法と経過	28
2) 層序	28
3) 検出遺構と出土遺物	28
3. まとめ.....	31

V 東弓削遺跡第16次調査 (H Y 2007-16)

1. はじめに

東弓削遺跡は、八尾市南東部に位置する、弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では八尾木、八尾木一～五丁目、八尾木東一～三丁目、東弓削、東弓削二・三丁目、都塚、都塚一～四丁目、刑部にあたる、東西約1.3km、南北約1.2kmがその範囲とされている。当遺跡は、河内平野を北～北西へ流下していた旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川が分岐する「二俣」地区北側の沖積地上に立地しており、この沖積地上には隣接する中田遺跡・矢作遺跡など多くの遺跡が展開している。この他、東側では玉串川の対岸に恩智遺跡・神宮寺遺跡、南側では長瀬川の対岸に弓削遺跡、西側では志紀遺跡・田井中遺跡・老原遺跡が位置する。

当遺跡は、昭和42(1967)年の国道170号線(外環状線)敷設工事の際、綠釉陶器等の土器類と瓦類が多量に出土したことが契機となり、今回の調査地周辺を含め、遺跡の北西部と南東部周辺を中心に発掘調査が実施されている。調査地の東側に接する道路上では、瓦、瓦器、埴輪、須恵器、土師器、弥生土器など弥生時代中期～鎌倉時代の遺物が出土しており(①)、その後、遺跡北西部



第1図 調査地周辺図 (S=1/5000)

表1 周辺の調査地一覧表

番号	略号	所在地	調査期間	調査原因	主な遺構・出土遺物	文献名	機関
①		八尾木～東弓削 1970/12～ 1971/1	公共下水道工事	包含層？：弥生土器（中期～後期）・土師器・須恵器・埴輪	山本昭編 1976『東弓削遺跡』八尾市文化財報告3 八尾市教育委員会	市教委	
②	93-298	八尾木東 2・3丁目	1993/11	公共下水道工事	溝状遺構（中世）、弥生土器壺・水差し・無頸壺・蓋（中期後半）、土師器杯・壺・高杯・須恵器壺・蓋杯（6世紀中頃～7世紀前半）、埴輪・瓦、土師器（14世紀）	八尾市教育委員会 1995「6. 東弓削遺跡（93-298）の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告32	市教委
③	2003-150	八尾木3 丁目	2003/9	保育園建設	土師器杯・高杯・羽釜（飛鳥）	岡田清一 2003「33 東弓削遺跡（2003-150）の調査」『八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告49	市教委
④	2003-239	都塚	2003/10	通信用鉄塔建設	不明遺構（鎌倉以前）、土師器（平安前期）	西村公助 2003「32 東弓削遺跡（2003-239）の調査」『八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告49	市教委
⑤	98-572	東弓削3 丁目	1998/6	個人住宅建設	落込み（中世）、瓦器（中世）、瓦（奈良時代～中世）	酒 斎 2000「32. 東弓削遺跡（98-572）の調査」『八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告42	市教委
⑥	HY88-03	八尾木東 3丁目	1988/1～2	宿舎建設	落込み・ビット（弥生後期～古墳前期）、水田（平安～鎌倉）、遺物 包含層（古墳初頭）	成海佳子 1988「III 東弓削遺跡（第3次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会報告40	研究会
⑦	HY86-2	東弓削3 丁目	1986	送電用鉄塔建設	整地層（奈良～鎌倉時代）、水田（鎌倉以降）	西村公助 1987「9. 東弓削遺跡（第2次調査）」『昭和61年度事業概要報告』財團法人八尾市文化財調査研究報告14	研究会
⑧	2003-127	東弓削	2003/7	店舗建築	水田（鎌倉）	西村公助 2003「32 東弓削遺跡（2003-127）の調査」『八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告49	市教委

を中心に発掘が行われ、周辺が弥生時代から近世にかけての集落・生産域であったことが判明している。また、当遺跡一帯は『続日本紀』にある「由義宮」「西京」の推定地にあたり、遺跡南部にはその中核をなした弓削寺跡が存在したとされ、今回の調査地はその北側にあたる。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市八尾木東三丁目地内で行われた公共下水工事(19-23工区)に伴う調査で、当調査研究会が東弓削遺跡内で行った第16次調査である。

調査地は発進立坑部分一箇所(規模7.6×7.6m面積57.8m²)で、四方を鋼矢板で囲まれており、南側が道路上のため覆工板に覆われていた。調査は1段目のH鋼設置後に開始し、掘削は現地表(T.P.+11.6m)下約1.7～2.3m前後まで機械・人力を併用して行った。平面的な調査は機械掘削終了面で行い、その際、調査区の中央から南側では覆工板を支えるH鋼の梁が東西方向に2箇所設けられていたため一度に全体の機械掘削ができず、南側・中央・北側に分けて行った。

地層は調査開始時に地表下約1.7m前後まで掘削が終了して上層が確認できなかったため、調査区北側に東西方向のトレーニチを設定して断面調査を行った。現地表下2.3～4.0m前後までは工事掘削に立会い、地層の確認を行った。

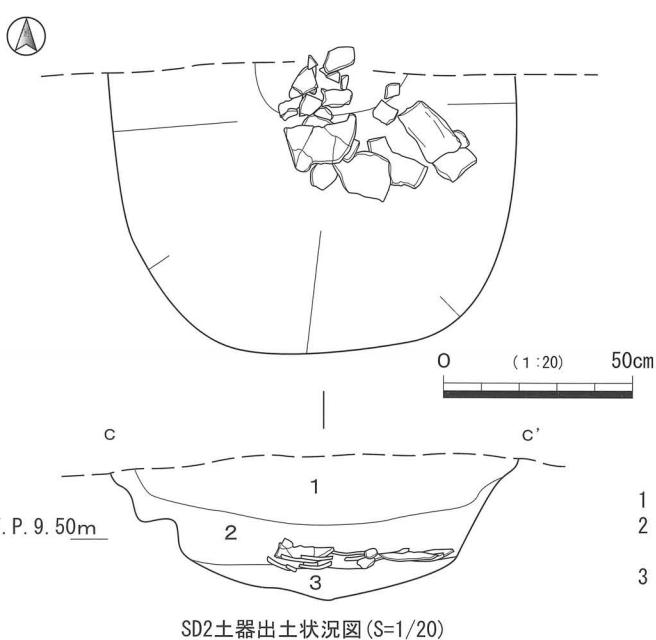
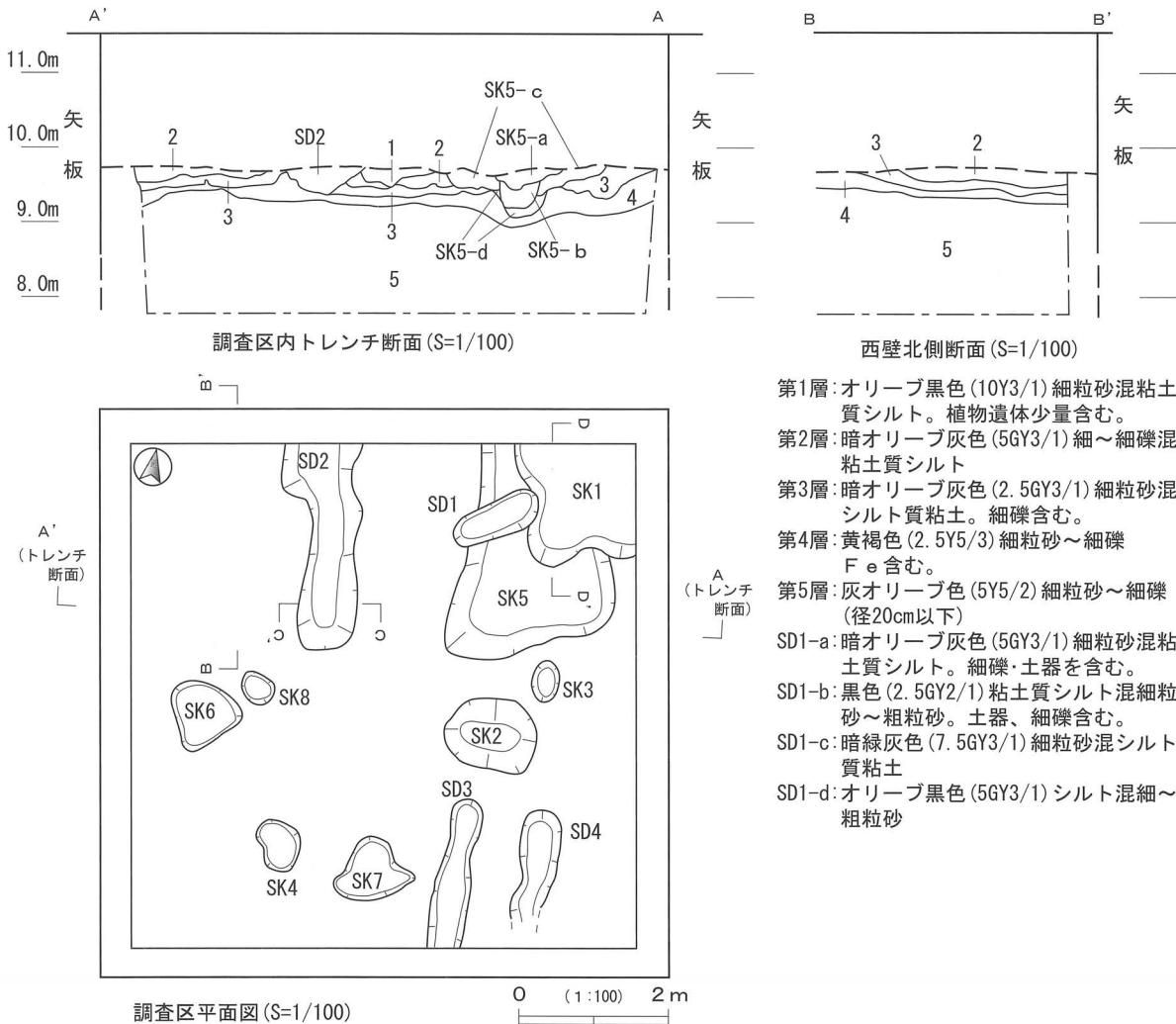
2) 層序

現地表下1.7～4.0m(T.P.+7.5～9.9m)の間で5層を確認した。第1層より上層は調査開始時には掘削が終了していたため不明である。第1層は中世の耕作土と考えられる層で、少量の有機物を含み、弥生土器・土師器、瓦器、平瓦などが出土した。第2層は古墳時代後期の土壤化層、第3層は古墳時代前期の土壤化層で、北に向ってやや落ち込んでいる。土師器、須恵器等の細片が出土した。第4・5層は古墳時代以前の河川堆積層で、湧き水が認められ、弥生土器片が少量出土した。この他、下層確認の際、調査区北壁際の一部で、第5層の砂礫に挟まれた暗灰～暗緑灰色粘土の落ち込み状の堆積を確認した。工事掘削中であったため平面的な調査ができず、詳細は不明であるが、河川堆積の一部である可能性が高い。

3) 検出遺構と出土遺物

機械掘削終了面で、中世～古墳時代の土坑8基(SK1～8)、溝4条(SD1～4)を検出した。

V 東弓削遺跡第16次調査(H Y 2007-16)



第2図 調査区平面・断面図、遺構平面・断面図

土坑（SK）

8基検出した。SK2～4・6～8の6基については深さが0.1m程で浅く、上層からの落込みである可能性が高い。各土坑の法量・埋土については、表2に示した。

SK1

遺物は、上層から完形に近い土師器皿(1)と、瓦器碗の小片(2)などが出土している。1はやや浅く、底面から直線的に立ち上がる。口縁付近や内面に煤が付着しており、灯明皿の可能性がある。2は口縁から高台の付け根まで残存する。口縁端部は丸みを持ち、口縁外側にはヨコナデが施される。高台は外面の付け根の一部が残る。2点とも12世紀後半～13世紀前半に比定される。

SK2

3は土師器甕の口縁部である。口縁はやや外反し、調整は外面のハケと内面のケズリが施される。6世紀に比定できる。4は須恵器杯身で、6世紀後半～7世紀初頭(TK43～TK209型式)に比定できる。5は須恵器高杯で、脚部のみ残存する。脚部は外反して広がり、端部は丸みを持つ。

SK3

6は土師器台付甕の台部と考えられる。4世紀頃に比定される。

SK5

7は口縁の一部を欠く。半球体の体部に大きく開く口縁部がつくもので、調整は外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキが施される。4世紀前半(布留式古相)に比定される。

SK7

遺物は土師器の小片が数点出土した。遺物から古墳時代と考えられるが、詳細は不明である。

表2 土坑一覧表

遺構番号	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	埋土	遺物
SK1	不明	1.5以上	1.5以上	0.1	暗灰色～暗青灰色(N3/～5G4/1)細粒砂混粘土	土師器・瓦器
SK2	楕円形	1.2	1.5	0.2	暗緑灰色(7.5GY3/1)細粒砂～中粒砂混粘土質シルト	土師器・須恵器
SK3	楕円形	0.6	0.4	0.1	暗オリーブ灰色(5GY3/1)細粒砂～粗粒砂混シルト	土師器
SK4	楕円形	0.7	0.5	0.1	オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂～粗粒砂混粘土	土師器(長胴甕)
SK5	不明	2.9以上	2.1以上	0.6	オリーブ黒～黒色(5Y3/1～5Y2/1)細粒砂～粗粒砂混粘土	土師器
SK6	三角形	1.0	0.9	0.1	オリーブ黒(7.5Y3/1)細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土(細礫含む)	土師器
SK7	楕円形	1.0	0.7	0.1	黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂～粗粒砂混シルトに粘土ブロック入る	土師器
SK8	円形	0.5	0.5	0.1	オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂～粗粒砂混粘土	土器

溝（SD）

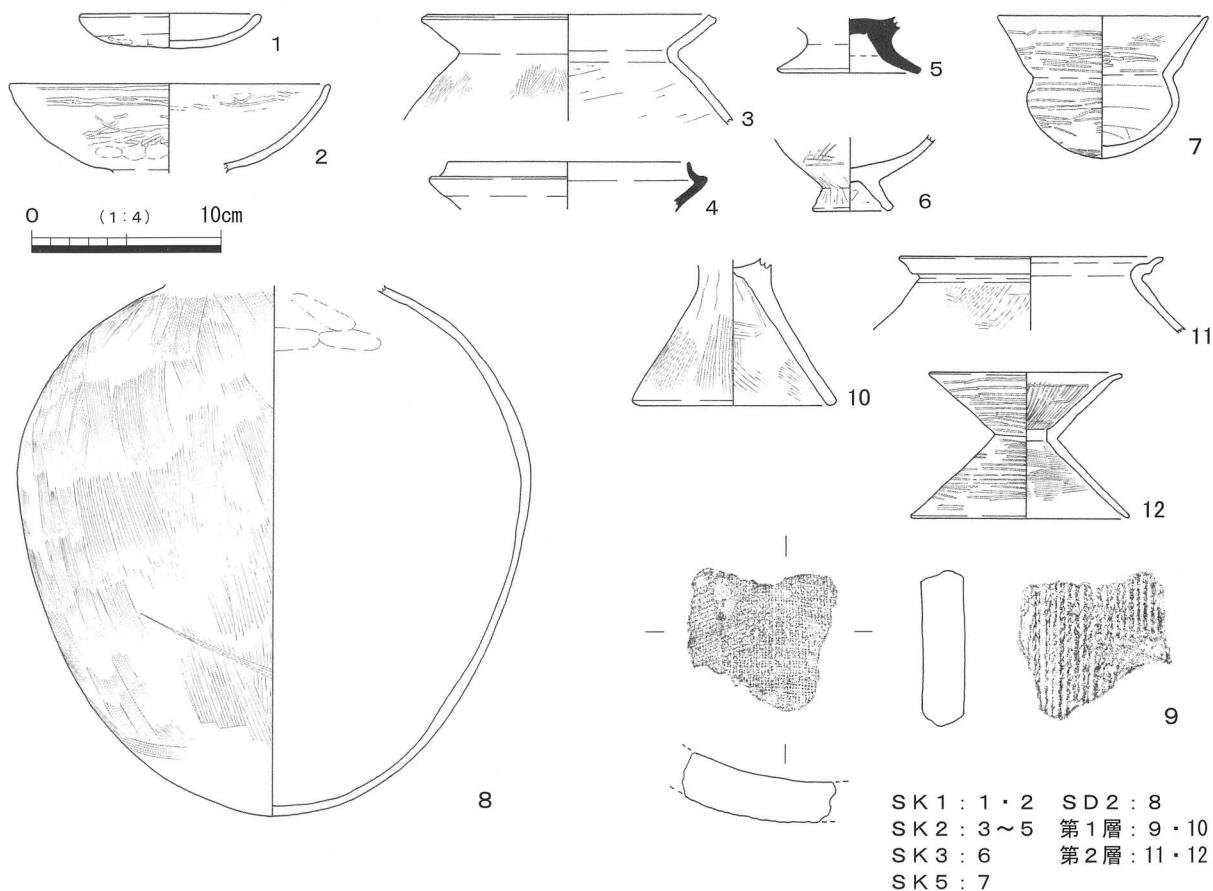
4基検出した。法量・埋土については表3に示した。SD2以外は遺物を含まないため時期は不明であるが、SD1は切り合いから帰属時期はSK1より新しい12世紀以降と考えられる。

SD2

南端から土師器甕(8)の破片がまとまって出土している。8は土師器甕で、底部～頸部まで残存する。調整は外面タテハケ、内面ナデ、ケズリが認められる。生駒西麓産で、5～6世紀と考えられる。

表3 溝一覧表

遺構番号	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	埋土	遺物
SD1	1.2	0.5	0.1	暗緑灰色(5G3/1)細～粗粒砂混粘土	-
SD2	2.8以上	1	0.3	暗オリーブ灰～暗緑灰色(2.5Y3/1～7.5GY3/1)細粒砂～シルト質粘土	土師器
SD3	2.0	0.5	0.1	暗灰黄色(2.5Y4/2)細～中粒砂混シルト	-
SD4	1.7	0.5	0.1	暗灰黄色(2.5Y4/2)細～中粒砂混シルト	-



第3図 出土遺物実測図

遺構に伴わない出土遺物

1層 9は平瓦で、凸面縄目タタキ、凹面布目痕、糸切り痕が残る。10は弥生土器台付鉢の台部である。調整は外面タテハケ、内面ナデが施される。弥生時代後期後半(V様式)に比定される。

2層 11は土師器甕の口縁部で、口縁が外方に拡張し、断面がS字状を呈することから東海地方に主に分布するS字甕と考えられる。調整は外面ナデとハケ、内面にナデが施される。4世紀に比定される。12は土師器鼓形器台である。調査区北側で屈曲部が上下に割れ、重なった状態で出土した。調整はヘラミガキ、脚部内面にヨコハケが施されている。4世紀前半に比定できる。

3.まとめ

今回の調査では中世～古墳時代の遺構と、その下層の河川堆積層を検出した。調査区北側で検出した第3層は古墳時代前期の遺物を含む土壤化層で、昭和50年度の調査で検出された青灰色粘土層に相当すると考えられる。

参考文献

- ・中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- ・田辺昭三 1981『須恵器大成』 角川書店
- ・原田昌則 1993「第5章まとめ 3 中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」『II 久宝寺遺跡(第1次調査)』 財團法人八尾市文化財調査研究会報告37 財團法人八尾市文化財調査研究会



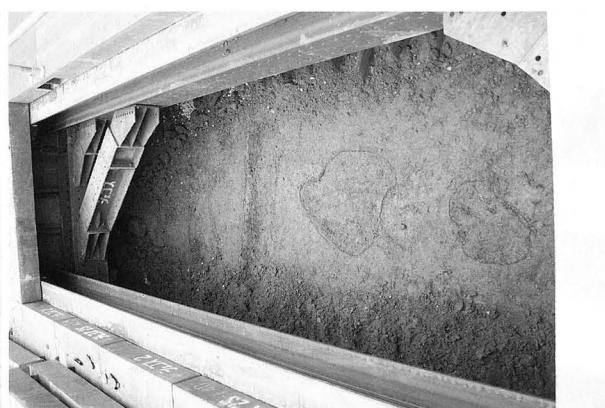
調査地全景(南東から)



調査区北側完掘状況(東から)



調査区中央完掘状況(西から)



調査区南側完掘状況(西から)



トレンチ断面東(北から)



トレンチ断面中央(北から)



トレンチ断面中央(北から)



トレンチ断面西(北から)

SK05・SD10土師器皿検出状況
(南から)

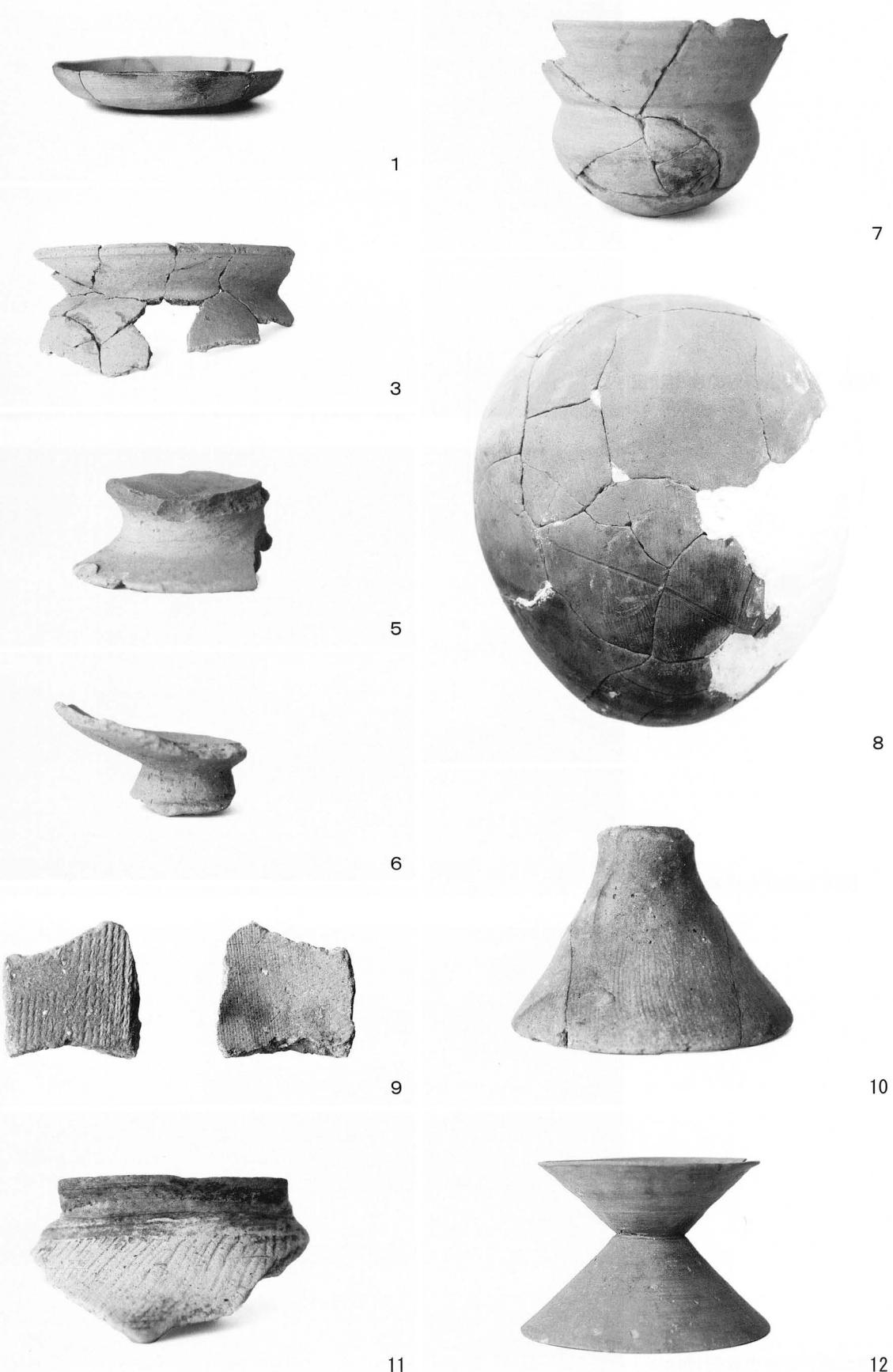


SD02土器出土状況(北から)



2層土器(12)出土状況(西から)





SK1(1)、SK2(3・5)、SK3(6)、SK5(7)、SD2(8)、1層(9・10)、2層(11・12)出土遺物

VI 弓削遺跡第8次調査(Y G E 2008-8)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市志紀町南四丁目地内で実施した公共下水道工事(19-29工区)に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する弓削遺跡第8次調査(YGE2008-8)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成20年4月25日～平成20年5月2日(実働4日)にかけて、木村健明を調査担当者として実施した。調査面積は約33.4m²である。
1. 現地調査においては、赤松英幸・川崎純弘・中野一博・和田直樹の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、随時実施し、平成22年3月に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、遺物実測－村井俊子、トレース－木村が行った。
1. 本書の執筆・編集は木村が行った。

本　文　目　次

1. はじめに.....	35
2. 調査概要.....	36
1) 調査の方法と経過	36
2) 層序	36
3) 遺構と遺物	38
3. まとめ.....	40

VI 弓削遺跡第8次調査 (Y G E 2008-8)

1. はじめに

弓削遺跡は八尾市南東部の志紀町南二・三・四丁目、弓削町三丁目に所在し、東西約0.5km・南北約0.7kmの範囲に広がる弥生時代後期以降の複合遺跡である。

地理的には、旧大和川の主流であった長瀬川左岸の沖積地上に位置する。周辺には北西に志紀遺跡・田井中遺跡・木の本遺跡、長瀬川を挟んだ北東に東弓削遺跡があり、南は市境を挟んで遺跡名が異なっているが、弓削遺跡と一連と捉えられている本郷遺跡(柏原市)が隣接する。

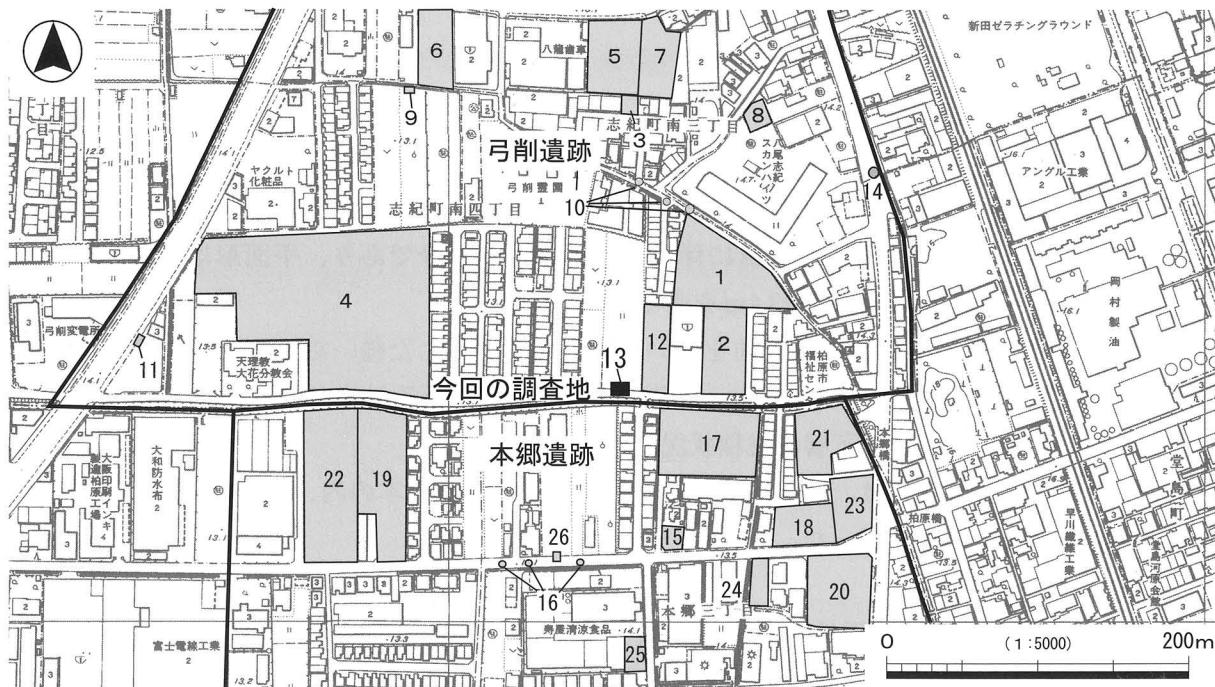
当遺跡内では、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会、本郷遺跡内では、柏原市教育委員会が発掘調査を行っている。

弓削遺跡・本郷遺跡の既往の調査については、第7次調査報告書(表1参照)に詳細に記されているので、ここでは調査地周辺(第1図の範囲)に限定して記述する。なお文中の番号は第1図・表1と対応する。

縄文時代 遺構は本郷遺跡北部の15で晚期の埋甕が検出されている。その他に16・26で縄文時代中期・晚期の土器が出土している。

弥生時代 前期の遺構・遺物はこれまで確認されていない。中期になると17で溝状遺構、22で土坑が検出され、16で土器が出土している。後期には両遺跡内で多くの遺構・遺物が検出されている。特徴的な遺構・遺物として、共に22で検出された方形周溝墓と小銅鐸がある。

古墳時代 前期は11で溝・落込み、15で井戸・溝状遺構、22で溝が検出されている。中期は4で土坑、22で堅穴住居・大溝が検出されている。4・5・15・17で埴輪が出土しており、周辺に埋没古墳の存在が考えられる。



第1図 調査地周辺図

表1 周辺の調査地一覧表

遺跡	番号	調査名	調査主体	主な成果	文献 / 発行年
弓削八尾市	1	90-533	八尾市教委	弥生後期末：土器	『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告 25/1992
	2	94-631	八尾市教委	弥生後期末：土器	『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告 33/1996
	3	98-380	八尾市教委	河川堆積層（弥生土器・須恵器・埴輪）、弥生後期：土器	『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告 40/1999
	4	99-429	八尾市教委	弥生後期：土器、古墳中期：土坑、古墳中期後半：埴輪、中世以降：井戸	『八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告 44/2001
	5	99-524	八尾市教委	弥生中期：土器、弥生後期：溝状遺構、小穴、落込、古墳中期：溝	『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告3 平成13年度』/2002
	6	2002-23	研究会	弥生中期～後期：土器・石器	『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告 48/2003
	7	2002-66	研究会	近世以降：溝	
	8	2004-347	研究会	近世以前：河川堆積層	『八尾市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告 53/2006
	9	Y G E 2002-4	研究会	弥生後期：土坑	『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』/2003
	10	Y G E 2003-5	研究会	河川堆積層	『財団法人八尾市文化財調査研究会報告78』/2004
	11	Y G E 2007-7	研究会	古墳時代前期後半：落込、古墳時代中期後半：溝	『財団法人八尾市文化財調査研究会報告112』/2008
	12	2007-54	研究会	奈良前期：土器群	『八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告 57/2008
	13	Y G E 2008-8	研究会	弥生時代中期・奈良時代：土器	本書
	14	Y G E 2008-9	研究会	河川堆積層	『弓削遺跡第9次調査 財団法人八尾市文化財調査研究会報告118』/2008
本郷柏原市	15	81-1次	柏原市教委	縄文晚期：埋甕、古墳初頭・前期：井戸、古墳中期後半：埴輪	『柏原市埋蔵文化財発掘調査概要 1981年度』/1982
	16	83-1次	柏原市教委	縄文中期末：土器、弥生中期～古墳前期：土器	『柏原市所在遺跡発掘調査概報一大県・田辺・本郷遺跡－1983年度』柏原市文化財報告 1983-IV/1984
	17	83-2次	柏原市教委	弥生中期中葉：溝状遺構、弥生中期～古墳中期：土器、古墳後期：埴輪	
	18	84-2次	柏原市教委	古墳後期：溝（須恵器・獸骨）	『本郷遺跡・玉手山遺跡－マンション建設に伴う』柏原市文化財概報 1984-VI
	19	85-1次	柏原市教委	古墳後期：須恵器・土師器・製塙土器	『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1985年度』/1986
	20	88-1次	柏原市教委	「現地表下2mで遺物包含層を検出」	『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1988年度』柏原市文化財報告 1988-I/1989
	21	89-2次	柏原市教委	中世以降：洪水層	『高井田遺跡・本郷遺跡－1989年度公共事業に伴う』柏原市文化財概報 1989-IV/1990
	22	91-1次	柏原市教委	弥生中期：土坑、弥生後期：方形周溝墓・溝（小銅鐸）、古墳中期：堅穴住居	『本郷遺跡 1991・1992年度』柏原市文化財概報 1992-III/1993
	23	91-2次	柏原市教委	古墳後期～飛鳥時代末：溝	『柏原市遺跡群発掘調査概報 1991年度』柏原市文化財概報 1991-IV/1992
	24	94-1次	柏原市教委	「現地表下0.9mで中世の包含層」	『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1994年度』柏原市文化財報告 1994-I/1995
	25	94-2次	柏原市教委	近世：溝、「中世の遺物包含層」	
	26	98-1次	柏原市教委	縄文晚期：土器、弥生後期～古墳前期：溝状の落込み（土器）	『本郷遺跡－公共下水道管理設に伴う』柏原市文化財概報 1998-IV/1999

* 調査主体名称の省略については以下の通り。八尾市教育委員会：八尾市教委、柏原市教育委員会：柏原市教委、(財)八尾市文化財調査研究会：研究会

奈良時代以降 遺構は23で古墳時代後期～奈良時代の遺物が出土した溝が検出されているにとどまる。12で奈良時代前半の土器が出土している。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

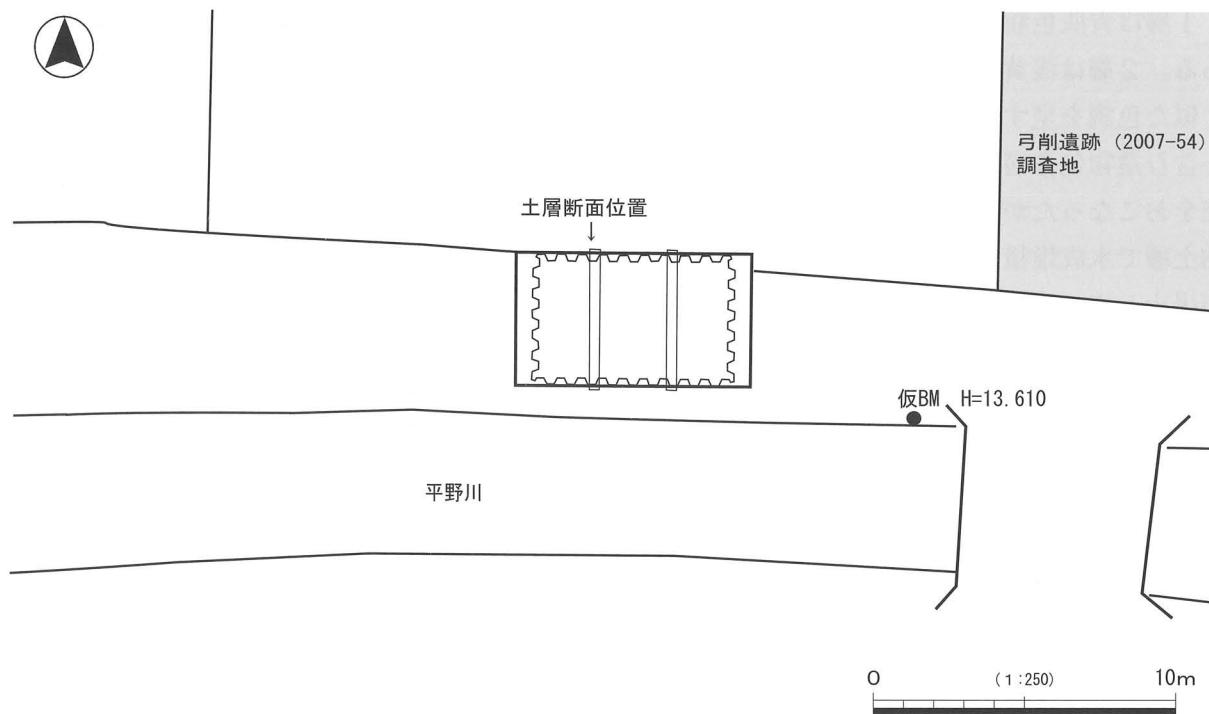
今回の調査は、八尾市志紀町南四丁目地内で計画された公共下水道工事(19-29工区)に伴うものである。調査地の南側には柏原市との市境である平野川が流れおり、弓削遺跡としては最南端に位置する。調査区は発進立孔設置に伴って掘削される部分であり、平面形は東西7.4m・南北4.5mの長方形を呈し、面積は約33.4m²を測る(第2図)。

発掘調査は地表下0.8mまで機械掘削を行い、覆工板を設置した後、以下1.0mを対象に人力掘削と機械掘削を併用して行った。また、工事による掘削深度は現地表(T.P.+13.6m前後)下約5.1mに及ぶため、当該深度まで下層の堆積状況を確認した。

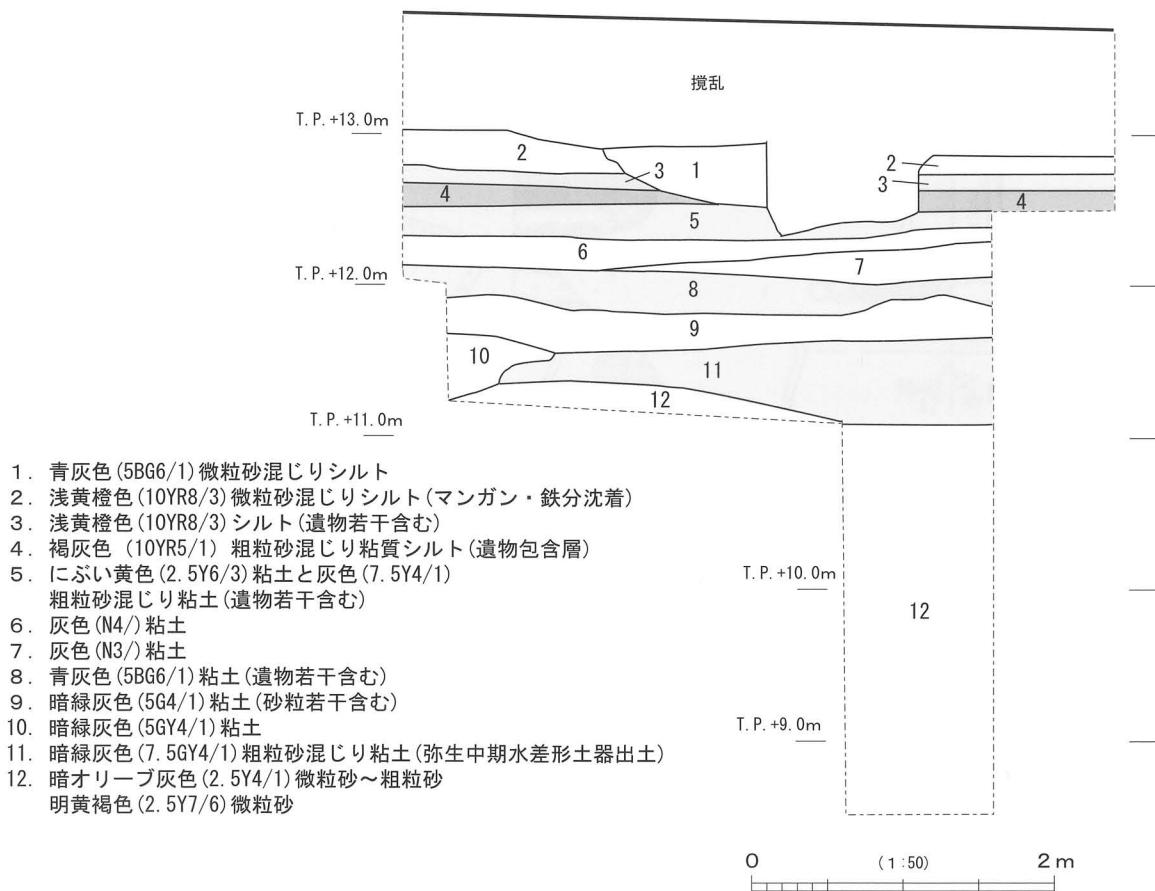
土層観察用のセクションは、覆工板を支える南北方向のH鋼2本の内、西側のH鋼の下に設定して観察および図化作業を行った。

2) 層序

地層は12層を確認した。現地表下1.1m(T.P.+12.8m)までは遺物を含まないが、T.P.+11.1～12.8mの間で弥生土器～奈良時代の土器を含む層を確認した(第3図)。



第2図 調査区位置図



第3図 土層断面図

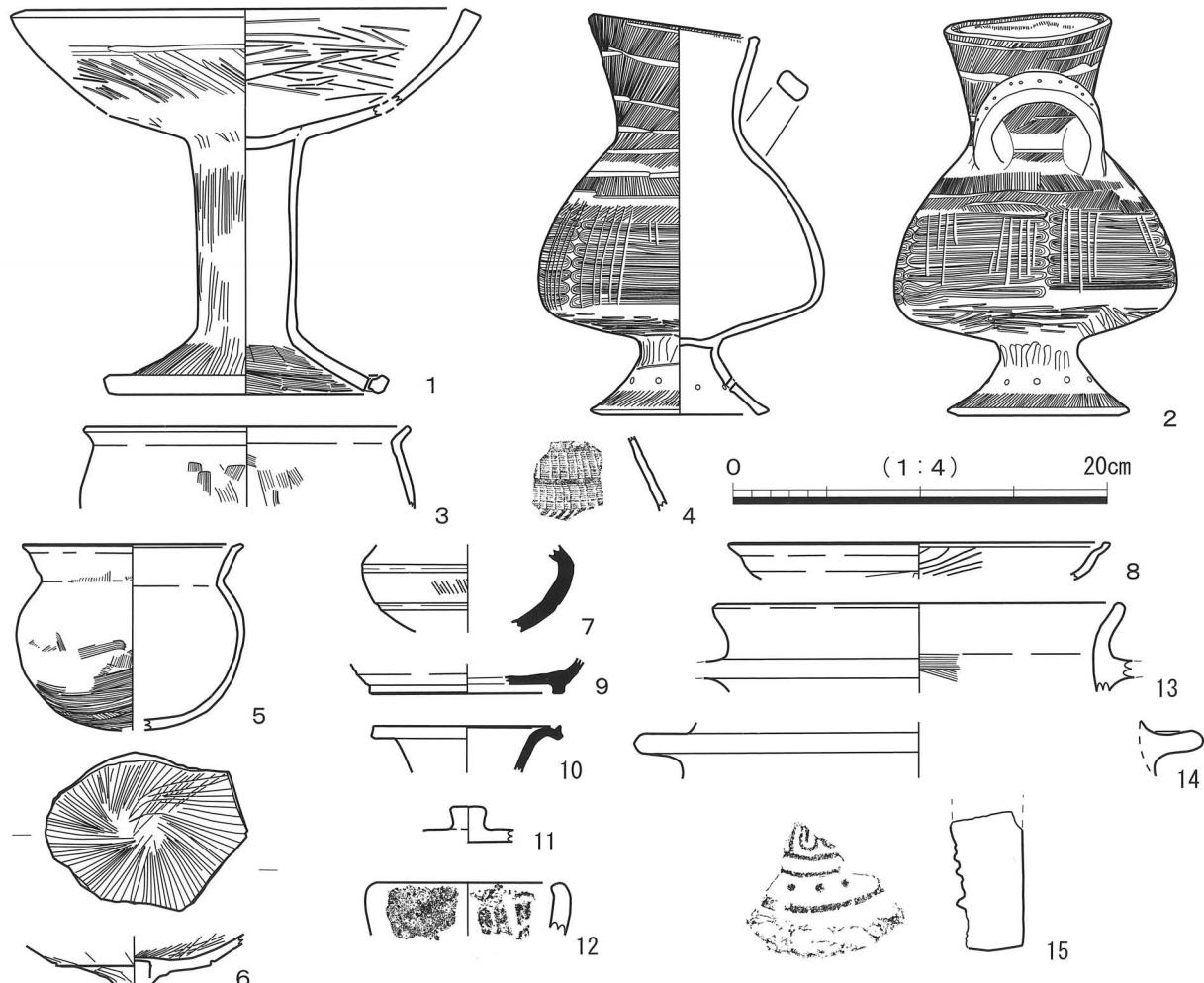
1層は青灰色粗砂混じりシルト層で、溝状に落ち込むが遺物は出土しておらず、時期は不明である。2層は浅黄橙色微砂混じりシルト層で、マンガン・鉄分の沈着が認められる。3層は2層と似た色調を呈するが、わずかに遺物を含む。4層は褐灰色を呈し、比較的多くの遺物(奈良時代)を含む遺物包含層である。5層上面はにぶい黄色を呈し、遺構の存在する可能性があったので精査をおこなったが、確認できなかった。5層中にも若干の遺物を含む。6～11層は灰色～青灰色粘土層で水成堆積と考えられる。8・11層は遺物を含む。特に11層からは、完形に近い弥生土器が出土した。12層は層厚が3.5m以上に及ぶ砂層である。湧水が激しく壁面の崩壊する危険が高かったため、詳細な観察は行っていない。

3) 遺構と遺物

今回の調査では、遺構は検出していない。遺物は弥生時代中期～奈良時代の土器が出土した。

弥生時代の土器(1～4)

1は高杯である。杯部は椀状を呈し、口縁部は面を成す。杯底部は円板充填を施す。脚柱部は中空で、裾部は「ハ」字状に広がる。端部は上方に拡張し、面を成す。裾部に直径2mmの円孔を6個穿つ。2は水差である。「ハ」字状に広がる台部をもつ。口縁部外面から体部外面上半にかけて斜方向の極めて密な櫛描刺突文を施し、横方向のミガキによって6段に区画する。体部下半は



第4図 出土遺物実測図

体部を5分割して縦描流水文を施す。また、把手外面に円形の刺突文、口縁部内面に短い直線状の刺突文を施す。台部は極めて密な櫛描刺突文を施し、直径4mmの円孔を10個穿つ。3は甕である。口縁部は短く、外方へ広がる。4は壺である。体部片で、外面に簾状文2段と刺突文1段を施す。3・4は生駒西麓産の胎土をもつ。

古墳時代の土器（5～7）

5は土師器甕である。口縁端部は外方へつまみ出す。体部下半に細かいハケを施す。6は土師器高杯である。口縁部は底面から段を持って立ち上がる。脚柱部との接合には挿入付加法を用いる。内面に密な放射状暗文を施す。7は須恵器甕である。体部に凹線2条を施し、その間に刺突文を施す。外面の一部に自然釉が付着する。

奈良時代の土器（8～15）

8は土師器皿である。口縁部は内彎し、端部は内側に肥厚する。内面に放射状暗文を施す。9は須恵器杯である。断面台形状の高台をもつ。内面が著しく摩滅しており、転用硯として使用された可能性がある。10は須恵器壺である。口縁端部は上方に拡張し、面を成す。内面に自然釉が付着する。11は土師器蓋である。円柱状のつまみをもつ。12は製塩土器である。胎土に直径2～3mm程度の砂粒を多量に含む。内面に調整の際の圧痕が認められる。13・14は土師器羽釜である。ともに生駒西麓産の胎土をもつ。13は鐸を欠損する。口縁部は短く外反する。14は鐸のみ残存す

表2 遺物観察表

番号	種類 器種	出土 層位	法量 (cm)	残存率	調整	色調	備考
1	弥生土器 高杯	11層	口径：(23.0) 器高：(22.0)	口縁部：1/10 裾部：ほぼ完形	外面：ミガキ 杯部内面：ミガキ 裾部内面：ハケ	外面：にぶい黄橙色 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙色 (10YR7/2)	裾部に円孔6箇所あり
2	弥生土器 水差	11層	口径：9.1 器高：21.5 底径：15.2	ほぼ完形	口縁部～体部上半：斜め方向の櫛描 刺突文、横方向のミガキで6段に区 画 体部下半：体部を5分割し縦描流水 文 取手外面：円形刺突文 口縁部内面：刺突文 台部：櫛描刺突文	内外面：橙色 (5YR6/6) ～浅黄橙色 (10YR8/3)	裾部に円孔10箇所あり
3	弥生土器 甕	11層	口径：(17.1)	1/12	口縁部：ヨコナデ 外面：ハケ	内外面：灰色 (7.5Y5/1)	
4	弥生土器 壺	11層			外面：簾状文 内面：ナデ	内外面：暗灰黄色 (2.5Y5/2)	
5	土師器 甕	11層	口径：(11.6) 器高：10.0	2/3	口縁部：ヨコナデ 外面：ハケ 内面：ナデ	内外面：明赤褐色 (5YR5/8) 断面：灰白色 (7.5YR8/1)	
6	土師器 高杯	11層		杯底部完形	外面：ナデ 杯部内面：放射状暗文	外面：にぶい黄橙色 (10YR7/2) 内面：にぶい橙色 (7.5YR6/4)	
7	須恵器 甕	11層	体部径：(11.3)	1/8	内外面：回転ナデ 外面に沈線2条と列点文	内外面：灰色 (N4/) 断面：灰白色 (7.5Y7/1)	
8	土師器 杯	4層	口径：(20.4)	1/16	口縁部：ヨコナデ 外面：ケズリ 内面：放射状暗文	内外面：橙色 (5YR6/6)	
9	須恵器 杯	9層	底径：(10.4)	1/6	内外面：回転ナデ	外面：灰白色 (N8/1)	転用硯か
10	須恵器 壺	4層	口径：(10.0)	1/6	内外面：回転ナデ	外面：灰色 (N6/) 内面：灰色 (10Y6/1)	口縁部自然釉 付着
11	土師器 蓋	4層	つまみ径：1.9	つまみ完形	内外面：ナデ	外面：にぶい黄橙色 (10YR7/4) 内面：灰白色 (10YR8/2)	
12	製塩土器	4層	口径：(9.8)	1/8	内外面：ナデ	外面：にぶい黄橙色 (10YR6/3) 内面：にぶい黄橙色 (10YR7/4)	
13	土師器 羽釜	4層	口径：(21.4)	1/16	口縁部：ヨコナデ 外面：ナデ 内面：ハケ	内外面：にぶい褐色 (7.5YR5/4)	
14	土師器 羽釜	4層	鐸径：(30.4)	1/8	外面：ナデ	内外面：にぶい橙色 (7.5YR6/4)	
15	瓦 軒丸瓦	4層	直径：(16.8)	1/6	瓦当面：内区 複弁蓮華文・界線2条 外区内縁 珠文3個残存 側面・内面：ナデ	外面：灰白色 (10Y7/1) 内面：灰色 (N5/) 断面：灰白色 (10Y8/1)	

る。15は軒丸瓦である。瓦当面の一部が残存する。瓦当の復元径は16.8cm、厚さは3.5cmを測る。瓦当文様は、複弁蓮華文で、蓮弁内に子葉を伴う。内区と外区の間に2条の界線を持つ。外区内縁に珠文帯を持ち、3個が残存する。外区は残存状況が悪く、当初の形状は不明である。

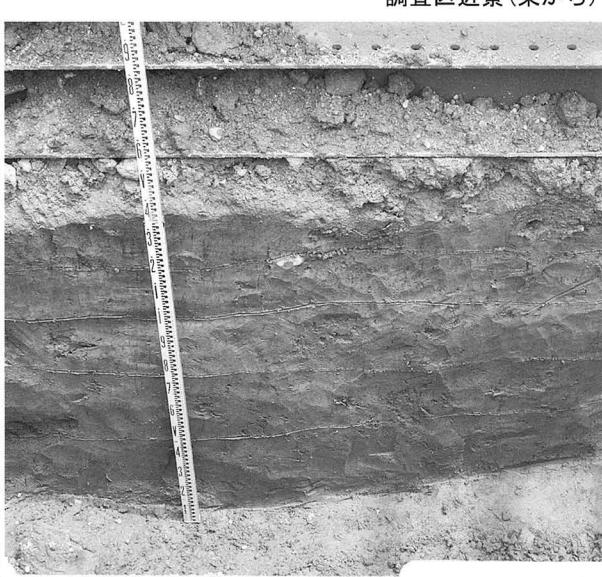
3.まとめ

今回の調査では遺構は確認できなかったが、弥生時代中期～奈良時代の土器が出土した。

弥生時代中期～古墳時代の土器は11層中から出土した。特に弥生時代中期の水差形土器(4)は外面に精緻な文様を施す良好な資料である。今回の調査では他にも壺(2)や高杯(3)など中期の土器が出土している。これまで本郷遺跡内で部分的に遺構が確認されており、本郷遺跡北部から弓削遺跡南部にかけて小規模な集落が存在していた可能性が考えられる。

古墳時代～奈良時代の土器はいずれも小片であるが、東側隣接地(弓削遺跡2007-54)と同様に奈良時代の土器が出土したこと、該期に調査地周辺を利用していたことが伺われる。

この時期の遺物には特徴的なものとして転用硯の可能性のある須恵器杯(9)や製塩土器(12)・軒丸瓦(15)があげられる。いずれも小片だが顕著な摩滅は認められず、遠方からの移動は考えにくい。これまで、周辺に寺院の存在は確認されていないが、未知の寺院や官衙などの遺構が周辺に存在している可能性が考えられる。

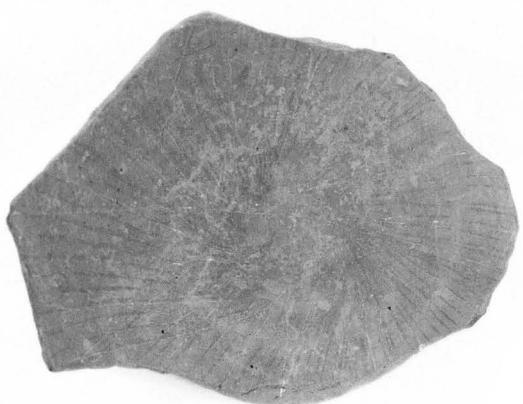
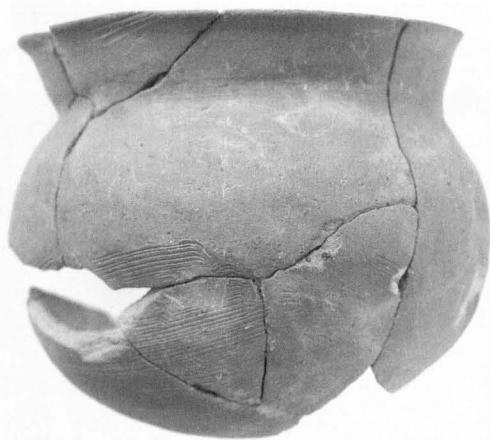




2



15



5

6

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	I おおたいせき (だい9じちょうさ) III たいしどういせき (だい12じちょうさ) V ひがしゆげいせき (だい16じちょうさ)	II おんちいせき (だい19じちょうさ) IV にしごおりはいじ (だい5じちょうさ) VI ゆげいせき (だい8じちょうさ)
書名	I 太田遺跡 (第9次調査) II 恩智遺跡 (第19次調査) III 太子堂遺跡 (第12次調査) IV 西郡廃寺 (第5次調査) V 東弓削遺跡 (第16次調査) VI 弓削遺跡 (第8次調査)	
副書名		
卷次		
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告	
シリーズ番号	129	
編著者名	I 坪田真一 II・III・V 米井友美 IV・VI 木村健明	
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会	
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700	
発行年月日	西暦2010年3月31日	

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおたいせき 太田遺跡 (第9次調査)	おおさかふやおしわかばやしちょうう3ちょうめ 大阪府八尾市若林町三丁目	27212	68	34度 35分 33.5秒	135度 35分 07秒	20090312 ～ 20090327 20090413 ～ 20090424	12.0	公共下水道
おんちいせき 恩智遺跡 (第19次調査)	おおさかふやおしょんちみなみまち2ちょうめ 大阪府八尾市恩智南町二丁目	27212	30	34度 36分 22秒	135度 37分 54秒	20080218 ～ 20080331 20080508 ～ 20080713	8.5	公共下水道
たいしどういせき 太子堂遺跡 (第12次調査)	おおさかふやおしのみなみたいしどう2・3ちょうめ 大阪府八尾市南太子堂二・三丁目	27212	62	34度 36分 42秒	135度 35分 20秒	20081024 ～ 20081031	26.2	公共下水道
にしごおりはいじ 西郡廃寺 (第5次調査)	おおさかふやおしいずみちょうう3ちょうめ 大阪府八尾市泉町三丁目	27212	46	34度 38分 58秒	135度 36分 17秒	20081225 ～ 20090107	28.5	公共下水道
ひがしゆげいせき 東弓削遺跡 (第16次調査)	おおさかふやおしやおぎ3ちょうめ 大阪府八尾市八尾木三丁目	27212	31	34度 36分 21秒	135度 37分 09秒	20080115 ～ 20080314	57.8	公共下水道
ゆげいせき 弓削遺跡 (第8次調査)	おおさかふやおしょくちょううみなみ4ちょうめ 大阪府八尾市志紀町南四丁目	27212	71	34度 35分 40秒	135度 37分 07秒	20080425 ～ 20080502	33.4	公共下水道

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
太田遺跡 (第9次調査)	集落	弥生時代～中世	なし	なし	
恩智遺跡 (第19次調査)	集落	近世	近世：土坑	近世：陶磁器	
太子堂遺跡 (第12次調査)	集落	近世	近世：耕作土層	なし	古平野川の堆積を確認
西郡廃寺 (第5次調査)	寺院	古墳時代・中世	古墳時代：ピット 中世：溝	古墳時代：須恵器 中世：土師器・須恵器・瓦質土器・白磁	
東弓削遺跡 (第16次調査)	集落	古墳時代・中世	古墳時代：土坑・溝 中世：土坑	古墳時代：土師器・須恵器 中世：土師器	
弓削遺跡 (第8次調査)	集落	弥生時代・古代	なし	弥生時代：土器 古代：土器・軒丸瓦	

要約	太田遺跡では弥生時代～中世に相当すると思われる地層を確認した。恩智遺跡では、近世の遺構・遺物を確認した。太子堂遺跡では、古平野川の堆積を確認した。西郡廃寺では、古墳時代前期のピットと中世の溝を確認した。中世の溝は2条が平行して延びており、近接した時期に掘削された可能性も考えられるものである。東弓削遺跡では、古墳時代前期の土坑・溝と中世の土坑を検出した。弓削遺跡では遺構は確認されなかったが、弥生時代中期の土器と古代の土器が出土した。古代の遺物には軒丸瓦1点が含まれる。
----	---

(財)八尾市文化財調査研究会報告129

- I 太田遺跡 (第9次調査)
- II 恩智遺跡 (第19次調査)
- III 太子堂遺跡 (第12次調査)
- IV 西郡廃寺 (第5次調査)
- V 東弓削遺跡 (第16次調査)
- VI 弓削遺跡 (第8次調査)

発行年 2010年3月31日
編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2
TEL・FAX 072-994-4700

印刷 (株)近畿印刷センター
表紙 レザック66 <260Kg>
本文 ニューエイジ <70Kg>
図版 ニューエイジ <70Kg>

太田遺跡 恩智遺跡 太子堂遺跡 西郡廐寺 東弓削遺跡 弓削遺跡

二〇〇年

財團法人 八尾市文化財調査研究会 報告

129